
精霊術師と三人の魔導師たちと

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊術師と三人の魔導師たちと

【Nコード】

N7009X

【作者名】

銀

【あらすじ】

身体が縮んだ。コナン君現象だと……！？ しかも魔力も無くなつただと……！？ あと一歩で局員全員の弱みを握れたというのに……まあ、いいか。とりあえず金品掻つ攫って新しい人生を謳歌しよう。そんな物語。

Prologue (前書き)

精霊術に関しては色々な作品の設定を拝借しておりますので、「
ん？ 見たことあるぜよ」と思った方、どうか暖かい目で見てやっ
てください。

Prologue

パリッ

「やっぱりポテチは元祖、うす塩味に決まってるね」

それが遠くで広がるファンタジックな光景を見ながらの第一印象だった。すっかり咀嚼しながら、きつとこの思いは最後まで一貫して頭に残るだろうと思ったりもする。それは、そのファンタジックな光景が俺にとって見慣れた光景の一つでしかないから。

町から数キロ離れた海面に、光芒は傍若無人に鎮座していた。周囲との調和を完全に無視したその光景は、町の住民が見れば空いた口は塞がらない代物である。

いくら結界が張ってあるとはいえ、この管理外世界 地球で魔法を乱舞させるなんて正気の沙汰とは思えない。管理局的でありだとしても、この国の法律は余裕で破っている。

自分たちの法さえ破ってなければ……それでいいのかねえ。

その個人の価値を優先する振る舞いに、思わずこう言いたくなる
いいぞ。もっとやれ！

繁華街の高層ビル、その屋上のフェンスに腰を掛ける俺はクスリと笑って、中空に乗るポテチさんを風の精霊を使って口に運ぶ。そんなでもって膝元に座る緋菜の頭を撫でる。

綿飴のようにふわふわしたウェーブを描く金色の長髪は指を走らせるとサラリと流れる。俺と同じく正面を向く緋菜の顔は伺えないが、心地よさそうに大きな碧眼を細めているのはまる分かりだった。緋菜に向けた視線を海面に引き戻す。

風の精霊を使って”見て”いるから自分の目は必要ないのだが、気持ち的な問題だ。

海面では、常人ごときが理解できる範疇を遥かに超えた非常識が展開されている。

例えるなら、怪獣大決戦。一方は魔力と物理の複合四層式の防衛プログラムを持つ触手やらなんやらがうようよしている本物の怪獣。肉眼で見れば背筋が凍り付きそうなくらいに不気味だ。どれくらい不気味かというと……やっべ、これマジやべえ、どれくらいやばいかというと、マジやべえっすわ、マジで　くらいだな！

もう一方は人間。数はいっぱい。お約束だな。

だがお約束は数だけ。人間側は”質より量”であるべきなのに、

「人間側、強っ」

こういう場合はBランクの魔導師が多数と少数のAランクであるうに、一人一人がA A Aランクは卑怯だ。視聴率の不興を買うだけだ。ただのリンチだ。怪獣乙な展開が見え見えじゃないか。

心情は怪獣の味方をしつつ、だからといって介入するつもりもな

く傍観に徹するのは行く意味がないから。俺一人が怪獣の味方をしてもあの戦力差では勝敗が目に見えている。しかも小さくなり、かつ魔力が切れているこの身体じゃ、ねえ。

状況は終始人間側の有利にあつた。

数年前に顔を合わせたことのある守護騎士たちに、彼女達に一步譲るものの十分な実力を兼ね備えたおよそこの小さくなった身体と同年齢の少女たち。

だが、それ以上に目を引くのは、

「化け物だな」

やはり少女たちと同年齢の少年二人。

あれはなんだ？

人間の魔力保有臨界点を明らかに超えている。放たれる砲撃が空間に干渉するほどの威力は、現代の技術で作成されるデバイスでは不可能だ。

ロストロギア。思い付くキーワードはこれと人造魔導師しかないのだが、これまたロストロギアは個人の人間の扱える代物ではないし、人造魔導師も現代の科学ではあそこまで強化はできない。

その二人がトドメとばかりに叫んだ巨砲で怪獣は完全消滅した。

「……………」

邪気。そう邪気のようなものを感じる。あの二人からは底知れない何かが潜んでいる。そう思うざるを得ない猜疑心が粘土のようにへばり付いて離れない。

今こそ晴れやかな笑顔で勝利の余韻に浸っているものの、渦巻く邪気のようなものが俺の不信感を募らせる。

「……おにいちゃ？」

「！ん、ごめん緋菜。ちょっと不気味なものを見てね」

「んー？」

緋菜に風の精霊は扱えないので、あの光景を見ることは不可能。星空を見上げているだけだったが、俺の感情の波が揺れたことに気付いたのだ。

義理でも、流石我が妹！

「何でもないよ」

緋菜をギュッと抱きしめて俺はゆっくり飛翔してその場から離れる。

光を屈折させて姿を消してはいるが、あの分けワカメな二人が気付かない理由にはならない。

未だ風の精霊が送る映像を脳内で見ながら、俺は結界の外へと向かった。

M a i n E v e n t ? 1 (前書き)

フッ。シリアスしか書けねーぜ。

クレイ(いけしゃあしゃあと)

Main Event? 1

あれから五年と半年。

六年前、ちょっとした出来事があったって身体が縮んでしまったが、時を経るごとにきちんと成長をしてくれたのは重畳だ。

肉体年齢はおよそ十五歳。仕方ないから日本の法に乗っ取って義務教育を受けている俺は現在中学三年生にある。学業というのは今まで修めたことがなかったから最初は新鮮だったが、如何せん実際に生きた年齢が他の連中とは違う。精神年齢の違いから小学生時代は本当に辛かった。皆、馬鹿ばっかだもん。

だがその苦痛も中三になると薄れていく。どこか俯瞰して見ているものだからクラスメイトたちの成長を知ると少し感慨深い気もしない。進路の違いとクラス分けで、その数は十にも満たないが。

俺の選んだ中学は、これ以上ないくらいハズレだった。適当に学校名の記したサイコロを緋菜と一緒に「なにが出るかな? なにが出るかな?」とご機嫌に転がしたのだが、まあハズレだった。幸運値が緋菜と違ってマイナスにある俺と一緒に転がしたのが間違いだった。

私立聖祥大付属中学校。私立なんて、ただでさえ学費が馬鹿にならないのに、その上、彼らがいるのだ。

五年半前に風の精霊で見たあの分けワカメども。

クラスが違う。それは唯一の救いだったと思う。あの二人を視界に入れると、冗談抜きで不快感が露になってしまふのだ。

生理的に受け付けられないだろう。

まあ、そんな話は置いていて、

「ハヤテさんよ、ハヤテさんよ」

「なんや、と言わせてもらう前に敢えて言わせてもらうで」

「グラハム・100エーカーである、と？」

「私はキミに心奪われた女や！ プーさん っ、とんでもない
コロボが発生しとる！？」

「どつちがいいと思う？ プーさんが修羅の道を求め、操縦桿を操
つて『はじめましてだね、ガンダム〜！』っていつのと、ハムさん
が森でひたすら蜂蜜をペロペロするの」

「どつちも映像が衝撃的過ぎるわ。プーさんの姿で、プーさんの声
で『僕はキミという存在に心奪われた熊だよ〜』って、どう考えて
も、その存在は蜂蜜やろ」

「プーさん・スペシャル。空中で蜂蜜をペロペロ」

「そこまでいったら機体に乗る意味ないやん。でも、あの世界にプー
ーさんがハムさんの立ち位置におつたら腹筋崩壊は確実やな」

「古来のガンダムファンからは、これ以上ない批判を受けるだろうが」

「私は支持するで。笑いは文化や」

「さすが関西弁を扱っただけあって笑いにお熱だな。半端な関西弁だが」

「それは一人称が『私』やからか？ そうなんやろ。だけど甘い。甘いでクレイクン（キリッ）」

「なるほど、少しでも個性を主張して出番を獲得するためか」

「ああん、言っちゃ駄目や。これから私がちょこつと盛り合わせしたストーリーの独白が始まるはずだったのに」

「どうせ、その盛り合わせは核を担う米が数粒しかないだろうが。米三粒、肉一切れ、キャベツ山盛り」

「チツ。バレとったか」

「仕方ない。俺が完璧な独白を見せてやろう。ストーリーは我が最愛なる妹、緋菜について。起承転結 よし、結は省こう」

「はい、アウトー。結を省くって永遠と語るつもりかいアンタ」

「二十四時間じゃ全然足りない自信はある！」

「相も変わらず物凄いシスコンっぷりやな」

「フフ、キング オブ シスコンと呼んでくれて構わない。」

「大変やな緋菜ちゃんも」

「大丈夫。あの子はキング オブ ブラコンだから」

「ブラジャーコンプレックス？」

「ブチ殺す」

「ちょ、冗談やって！ そんなマジな目にならんとつてや！ 瞳からハイライトが消えとるで！ ブラザーコンプレックスやるッ！」

「命拾いしたな。あと二秒遅ければ真夜中に八神家のインターホンを連打しにいくところだった」

「地味に、いや、完全に最悪な嫌がらせや！ そんなことされたら私もピンポンダッシュがしたくなるやんか！」

「あれは中々スリルがあつたぞ。押したと同時に家主が偶然扉を開けたらどうしよう、そんな緊迫感のある遊びはそうそう見付かりはしない。若い頃は、軒並みすべてを猛ダッシュしながら押したもんだ。やりすぎて最終的に武器を持ち出した家もあつたが」

「な、なんと羨ましいことを……！ くっ、私もやってみたかったけど、昔は車椅子のお世話になつとつたから」

「車椅子じゃ捕まるわな。だが、ハヤテよ。まだ諦めるには早いだろ」

「ま、まさかクレイクン……！」

「きつと、まだいける年齢だ」

「！　そうやな！　諦めたらそこで試合終了やもんな　なん
て言うわけないやろっ！　ピンポンダツシュが許されるんは小学校
低学年までや！」

「見てみたかったんだがな。中三の女がピンポンダツシュ……。あ
いたたたた。俺、居合わせたら絶対写真とって翌日の掲示板に貼り
付けるわ」

「私のすべてが地に墮ちる瞬間やな。分かります。ちなみに最初に
言おう思うたけど、私の名前は確かにはやてや。けどカタカナ変換
はいただけん。どこぞの完璧超人の借金執事と誤解されてまう」

「そうだな。口調的にも中の人的にも相沢　」

「そこまで！　ネタバレは芸人の心をデストロイヤーする悪魔の囁
きや。」

「プーさんの囁き……だと……!?!」

「悪魔や。『あ、熊』なんて無理あるやろ」

「諦めたらそこで試合終了なんだぞ」

「本音は？」

「諦めたら敵チームのドリンク剤に下剤をぶち込め」

「それ無理ゲーやろ」

「同じ形状をした水筒をこちら側で用意して、足が滑ったつって敵陣にぶち込めばミツシヨコンコンプリート。後半戦の敵はケツに力を入れて踏ん張ってるから、ソツと腹を押してやれば爆発は起きる」

「鬼畜すぎる。最凶最悪の監督や」

「俺はただ、限界まで溜め込んで外に出たいと苦しんでいる彼らに協力しただけだ。ボカーンッ！」

「そのボカーンの意味は……」

「ん、口答では、とても言えたもんじゃない。だって厨二に隣接しているお年頃だもの」

「まあ、厨二に隣接しとるお年頃やなくとも口答で言えたもんやないけどなあ」

「ならば敢えて俺が言おう」

「なんでやねん」

ビシツとはやての鋭いツッコミが決まる。

「今日もやるじゃないか、はやて。さすが関西弁を扱っただけのことはある」

「クレイクンも、ナイスボケや。最後の最後で基礎の『なんでやねん』を引き出すその話術。策士やな」

そう言つと俺たちはくつく、と笑つ。

この話題に逡巡もなしについて来れるのは、マニアックなネタと頭の回転力を兼ね備えるはやてしかないだろう。

どんな無茶難題の振りをかましても打てば響くように返ってくる。彼女との出会いだけがこの学園に来た唯一の利点と言えるかもしれない。

あの五年半前の出来事の該当者、あの二人の知人であったため初めは敬遠していたが、同じクラス、席が隣になって触れ合つてみると見事に意気投合。やばいくらいに楽しい。

「はやてちゃんと時神くん、本当に仲がいいね」

と、控えめな声はやての後ろの席から入る。

「当たり前や、すずかちゃん。クレイクくんは将来の相方候補生やからな」

「候補生かよ」

別にシヨックでもなんでもないが、ツッコミは必要なので入れてみた。

展開についていけず、ずっと聞き手に回っていた少女は月村すずか。深い紫色の波を打った長髪、それに乗る白いカチューシャ。アメジストの瞳。

容姿、発育共に非の打ち所のない美少女だ。多分、学園で一番俺

の好きなタイプだと思う。はやても美少女といえば美少女だが、身体の発育は、……乙、だ。

「なんや、今、不愉快な電波を受信したで」

「木の精だ」

「字が違わないかな？」

「月村、これはワザとだ。はやて、続けるがいい」

「……なんか納得いかんけど、まあ流しといたる。この海鳴市ならクレイクンは指折りの素養の持ち主やけど、関西にはそれすらも越える漫才師がごまんとおるんやで。街角のおばちゃんですら並々ならぬ力量を持つておる」

「誇張しすぎじゃないか？」

「かー！ これやから田舎もんは」

なんか凄い残念なものを見るような目をされた。非常に不愉快だ。ぶん殴つてやるうか。

「というかお前もその田舎もんだらうが」

「心の話をしとる」

「まあ、ウザい」

「黙つてきけ」

ニツコリと笑う俺とはやてのソレはメンチの切り合いと同じ意味であった。

「クレイくんとすずかちゃんは、もっとバラエティ番組を見るべきや！」

「え！？ 私も？」

反応したのは月村だった。

「俺はともかく、月村は確かにもっとレパートリーを増やすべきだな」

「私……結構、本読んでるよ」

それは休み時間の行動から察するが、

「違うねん！ 今はそういう話をしてるんちゃうねん！ ええか、すずかちゃん。これから先、波のように押し寄せる登場人物に負けだけのインパクトを習得せんと、空気キャラなんて悲惨なポジションに左遷されてしまふんや。」

例え名前が出て来たとしても『あゝ、そんな奴いたな』ってあっさり幕を降ろされるんや！ 一発芸人と同じ末路を辿ることになるんやで！？ それでいいんかすずかちゃん！」

はやての演説じみた説教が熱を帯びる。

穏やか、優しい、大人しい、読書好き……確かに、いつからか扱

いが難しくなつて脇役に左遷されそうなのは同感だがな。

「押し寄せる登場人物……？」

「私たちはフィクションやから当たり前や！」

「はやて、それは危険だ。自重しろ」

「なに甘つたれたこと言つとるん！？ 媚びず、退かず 自重せず！ はやて仕様お笑い三原則を忘れたんか！ あの夕日に掲げ誓つたコンビの絆をッ！！」

「候補生つて言つてただろお前。漫才は終わったんだ、さつさと正気に戻れ」

「いやや！ 今日こそはクレイクンに関西のおばちゃんの強力さを！ すぐかちゃんに空気キャラにならんための秘技を叩き込んだる！」

完全に熱血スイッチがオンになったはやては周囲の目を気にせず、勢いよく立ち上がつて握り拳を作つた。

置いてきぼりの俺と月村は何とも言えない苦い顔をする。これから起こる出来事が手に取るように分かつてしまった。

このままではホームルームが始まっても語り続けそうだ。

仕方ない。

「まずは、重症のすぐかちゃんからやあ！」

ガサゴソ（はやての机、物色）

「ええ!？」

タータラ、ララララン（ハリセンGetだぜ）

「すずかちゃんのインパクト上昇には、その豊満な肉体を駆使する必要があるんや」

はい、せーの

「とりあえず、まずは脱いでみよ」

バッチコオオオオーンッ!!!

「ぎゃあああああああああああ!?!？」

はやて専用ハリセンMk-2と太字で書かれたハリセンで思い切り顔をシバく。頭ではない。より強い苦痛を求めての行動である。

回避も防御も間に合わないはやては盛大に後ろへずっこけた。痛い痛いゴロゴロ転げ回る。

「悪は去った」

「あ、ありがとう……?？」

血糊を払い退けるような動作をしてハリセン（戦利品）を自分の机に仕舞ったところでスピーカーからチャイムの音が鳴りはじめた。

「目が！ 目があああ！？」

なんて言う何処そのムスカ大佐はスルー。いつまでネタに走るつもりなんだ。

あっさりはやてを見捨て、他人のふりをして他所を向いていると、不意に教室のドアが開いた。

カツ、カツ、カツ、と凜々しい足音を立てて現れた一人の男。一見すると青年実業家を思わせる風貌をしている。くせっ毛の金髪に、しかしまだ少年のあどけなさが残る面立ち。

着こなしている服は 軍服。

「諸君、朝の挨拶。則ち、おはようという言葉はこの私、グラハム・エーカーが慎んで贈らせてもらおう」

前時代がかった口調を好み、その行動も基本的スティックそのものな古典の教師兼、我らがクラスの担任は『サムライ』や『武士道』という言葉がすんなりと馴染む……ような態度を取っている。

俺は斜め後ろの席に座り、苦笑する月村にコソツと囁く。

「あれが分かりやすい、主役級争奪戦で長生きしそうなタイプだ」

「な、なるほど。確かに変わったもんね。山田先生」

その言葉にピクツ山田は耳聴く反応した。

「月村よ！ 私はグラム・エーカーと名乗ったはずだ！ 気を付けてもらおう！」

「す、すみません！ ……でも、山田太郎先生ですよ？」

「グ・ラ・ハ・ム・エ・ー・カ・ー！！！」

「山田だろうが。00が放送された途端、髪型に髪の色、口調に性格、体つきまで散々いじくり回して。山田太郎のくせに、グラム・エーカーって、影響受けすぎにもほどがあんだろ」

「時神、お前もか！ いつまでも仮の名前で呼びおって」

「うん、仮が逆だから」

「ええい、このままでは埒外あかん！」

お前があかなくさせているんだ。

山田は険しい表情で一步下がると教卓に乗せた帳面を開く。

「トランザム（出席確認を取る）！」

馬鹿がいる。阿保がいる。厨二がいる。批判きそつだ。

適当な発言ばかりするものだから一々翻訳をしなければ収集が付かない。

「少年！ 少年！ 少年！」

ほら、意味が分からない。これが出席確認というのだから、きつと彼は終わっているのだ。主に頭が。

クラスメイトたちも、もう慣れたのか出席番号順に「はい」「はい」とテンポよく返事をしている。きつと、この一年の時を過ごし卒業して新たな地へ飛び立つ彼らは常人ならざる順応性を開花させているに違いない。担任の頭が弱いから。

「痛た……。ようやくムスカも収まってきたわ」

今まで山田にも構ってもらえず、いい加減淋しかったのか、はやては起き上がり席に着く。

……………。

「またシバかれないか、はやて」

伝わる。ムスカも収まってきた、で伝わるのだが、いつまでもギヤグに突っ走って変な表現をするのはいただけない。ただでさえ山田という馬鹿がいるのに、はやてという阿保まで混ぜたら、教室は永遠にカオスだ。

「冗談や。ようやく私の熱きパトスも収まってきた」

「……………まあ、よしとしよう」

疑心は解けなかったが、ハリセンを炸裂させるのはやめておく。

「ハム先生は今日も元気やな」

「うっざいだけだ」

溜め息と共に頬杖を着く。

「それも分かるけど、それ以上に楽しくないか？ あんな濃い教師は他におらんとと思うで」

「あんなものがちらほらいてたまるか」

学校に二人もいれば崩壊は免れない。

「少女！ 少女！ 少女！」と連呼して、ようやくブツ壊れた出席確認が終わる。平静を保つクラスメイトたち。本当にこいつちの順応性の高さには感心すらも覚えてしまう。

山田（絶対にグラハムなんて呼んでやらん）は出席名簿を畳み、「全員出席だな」と満足げに頷くと教卓に両手を着いて生徒を眺める。

「諸君、この私、グラハム・エーカーが勤める今日の体育は二組の時間割変更に従い、彼らと合同となる」

……………えー。

山田から齎された言葉は俺の気力を根こそぎ奪ってしまう残酷なものだった。ざけんな、と声を張り上げる気も湧かないくらい、とんでもない脱力感に襲われる。

「なのはちゃんらのクラスやな」

「楽しみだね」

ああ、お気楽なはやてと月村が羨ましい。中空に『 』なんて浮かしゃがって。はやてはどう考えても『禁』だろうが。

「なんや、また不愉快な電波が」

「木の精だ」

「二度ネタはタブーや」

「鬼の精だ」

「よし」

「よし、なのかなこれは？」

「すずかちゃん。世の中すべてのもんを受け止めるなんてできへんのだよ。必要性のあるもんだけを見抜いて生きる。それが大人というもんや」

「格好いい発言だけど、使いところのせいで素直に頷けないよ」

「ぼーややからな」

クールにフツと笑うはやてはハリセンでやんわりと叩いておいた。ツッコミ待ちだったし、俺も少しでもストレス発散をしておきたか

ったから円満に終わる。

しかし鬱々とした気持ちが消えることはない。

それもそのはず。二組には俺が敬遠している二人が所属しているのだ。

確か……天之川 刹那とゼロ・レオンハルトだったか。

なんとも厨二臭い名前である。

ちなみに俺は、昔日本人の女性に引き取られて、時神の日本姓を得たので名前のクレイに漢字はない。馴染む漢字が存在しない。

それはともかくこの二人と対面するなんて虫酸が走る。食わず嫌いならぬ会わず嫌い、だが、そう思っても仕方ないほどあの二人からは異質な空気を感じる。

山田にそれだけは、と懇願したいのだが、山田にそんな言葉を口にするのも虫酸が走る。

「教師として公平なジャッジをしなければならぬが、担任として敢えて言わせてもらおう！ 必ず勝利するのだ！」

死ねばいいのに。

決め顔で激励を飛ばす馬鹿に本気の殺意を抱いた。

風の精霊を使役すれば、窓から駆け抜ける春の陽気なそよ風一つでヤツの首を”ポロリもあるよ”にできるのだが。

仕方ない。サボるか。

「時神、サボりとは関心できんな」

「……山田」

なんで、気付いた？

「心眼は鍛えている。そして、私は山田などという名ではなく、グ
ラハ」

「あー、分かった分かった。ハム先生。これでいいだろ」

「うむ！」

「いいんやな」

この馬鹿なら体育の時その場にいなかったら校内放送や自分の手で探し出したりだって、平然とやりそうだ。ていうか、絶対やる。

そんな迷惑なことをされ、なおそんなことで有名になるなんて、いよいよハムを微塵切りにしなければいけないくなる。

「……ちゃんと授業に出ればいいんだろ」

「分かればよい」

上から目線……！！ このハム野郎……！！

「クレイクン、どげどげ」

「ああ、分かっているよはやて……！ やるなら夜道で背後から、だろ。上手くやるさ」

暗殺か。ピンポンダッシュで培った、人込みや自然の一部と化して行動する能力を使えば余裕だな。

「そうそう、抜き足差し足忍び足　グサアッ！　って阿呆ッ。そんなこと言つとらへん！」

スパン！

奪ったハリセンを取り戻したはやてが俺の頭に一閃。

「大体、ハム先生をやって警察のお世話になるなんて、損失以外のなににもんでもないで」

「それもそうだな」

殺す価値もないとは、まさにこのことだ。

「お前たち、本人を前にいい度胸だな」

おっと聞こえていたか。

「まあ、多少の暴言は認めよう。私も大人だからな」

「アリガトウゴザイマス（棒読み）」

俺も大人だから多めに見てやる。良かったな。

ようやくハムは俺から視線を外し、何か言おうとしたが、腕時計で時間を確認すると、

「もう、こんな時間か。今日は一時間目から私は授業ある。連絡事項は述べたからホームルームは終わらせていただく」

有無を言わず一方的にまくし立てると、ハムは淡々と教卓に置いた所持品を回収して外に出て、

「しからは」

ピシヤリと教室のドアを閉めた。

数秒間、いたたまれない空気が教室を支配したが、時を経るに連れて活気を取り戻す。

「あの男のワンマンっぷりもあそこまでいけば逆に清々しいな」

「ゴーイング マイ ウエイやもんな。これは当分、主役級の登場は確保されたも同然や」

俺としては是非とも遠慮したいのだが……

「ここぞって時に現れそうだな」

「いいとごどりか、空気をブチ壊すかの二択だな」

どっちにしる現場にいた者にとってはデメリットでしかない。風

の精霊で常に監視でもしておくべきか？

「いつそ事件でも起きて最初の被害者になってもなってくれれば俺も喜色満面で葬式に出席できるのだが。」

「それよりも」

「はやては怒気を孕んだ低い声を上げた。」

Main Event? 2

「すずかちゃん!」

その矛先は月村へ向けられた。

唐突に怒鳴られた月村は何が何だか分からず、目を白黒させている。

チラツとなぜ怒られたか理由を問う視線を向けてきたが、残念ながら俺もはやての思考回路は理解できない。静かに首を振るうだけだ。

「どうしてさっきのやりとりに一言でいどしか喋らんかったのや!」

「え……ええ!?!」

……ああ、なるほど。と、それだけで理解してしまった俺もなかなか末期かもしれない。

「ハム先生が来る前に言ったばかりやんか。波のように押し寄せる登場人物に負けんだだけのインパクトがないと空気キャラへと左遷されてしまうって。今のすずかちゃんはまさしく空気やったと言えるで!」

まあ、そういうやつって結構いるんだがな。何か意見を言い合ったりはせず、輪に入ってたただ聞き役に徹するタイプは。

物語に必要かどうかと聞かれると、安易には頷けないが。

「こつやって私に怒られてスポットライトを浴びるんもあかん。自然の流れで会話に参加して、シャキンと心地好い言葉を放てるようにならんと、『すずか消えたww』なんて言われるで！ それでいいんかDear Friend!？」

「なんで英語？」

打てば響くような切り返しのチャンスを与えたつもりなんだろうが、しまった。先に俺が言ってしまった。

だが、はやては挫けない。

「よし、すずかちゃん。今のクレイクんのツッコミより一層キレのあるツッコミを見せるんや。ハリセンも貸したる」

半ば押し付けるようにはやてはハリセンを握らせる。

とんでもない無茶ぶりに月村は視線を右往左往させて激しい動揺を見せる。はやてのお笑い魂の熱量を知るクラスメイトたちは冥福を祈りながら、しかし被害が及ばないようにいつでも逃走を計れる距離を取っていた。薄情な連中である。

仕方ないから俺は抜き足ではやての背後に回って、月村と視線を合わせた。

ザ・アイコンタクト。

(ク、クレイクン。どうしたらいいの!?)

(落ち着け月村)

(でもはやてちゃん。鬼のような形相をこっちに向けてくるんだよ!?!? こんなはやてちゃん見たことないよ!?)

(お前の心配をしているからだよ)

(え? 私の?)

(そうだ。親友であるお前が空気となつていつの間にかいてもいなくても同じような存在になることが我慢ならなんだよ。立場を逆転させて考えてみる。お前は嫌じゃないか?)

(……嫌。凄く嫌だよ、そんなの)

(だろ。だからはやてはどんな手段を使つても、変な印象を抱かれようとも、お前に不安や疎外感を与えさせたりなんてしたくないんだ)

(でも……私、どうすれば)

(ツッコミを入れるんだ。今のはやてはそれしか望んでいない。幸いお前には笑いのアルテマウェポンが託されているじゃないか)

(あ……)

(はやての期待に応えるんだ。さあ、思いきり振り上げろ)

(思い切り……)

(手加減は侮辱だ。思いきり振り上げ、思いきり振り下ろせ)

(分かったよ。私、やってみる！)

意を決した月村の顔に最早、迷いはない。

自ら進む道を決めた、強者の瞳をしている。その姿たるはまさに豪華絢爛の凛々しき騎士。

一皮剥けた彼女は躊躇うことなくアルテマウェポンを振り上げる。

教室の騒音が嘘のように静まり返り、無音になったのは俺がこの光景に夢中になっていたからだろうか。こんな空気、久々だ。成長した人間が見せるオーラを前に、俺は自然と口元が緩んでいた。

もしかするとはやてもそんな表情を浮かべているかもしれない。

成長したすずかの放つ一閃を真っ向から立ち向かうつもりか、一切動く気配はない。

そして、時は動く。

高々と振り上げたアルテマウェポンが手加減なく振り下ろされたのだ。

月村は叫ぶ！

「な、なんでやねん!!」

この時、俺とはやてはすっかり油断していた。

月村すずかという人間の身体能力はとても高い。女性特有の繊細さと、その穏やかな性格からは想像もつかない豪胆さを兼ね備えた彼女は体育において無敗の強さを誇り、男子すら屠り、その名を運動部へ知らしめているのだ。

その実力は俺もはやても知っている　そう思っていたが、どうやら月村は体育の授業ごときで真の力を発揮することは不可能だったのだ。

ズゴオオオーン!!!!

「は?」

目の前の状況が理解の範疇を越えた俺は、らしくない素っ頓狂な声を上げてしまった。

ズゴオオオーン?　何だ、この音は。ハリセンで叩いた音ってせいぜい、バシッだろ?　ズゴオオオーンって必殺技が決まったような音は立たないだろ?

本当に、教室が水を打ったように静まり返る。誰もが啞然として硬直していた。

はやての頭が消えたのだ。ハリセンが振り下ろされたと同時に、まるで跳ね飛ばされてしまったように消えたのだ。

「はやて……？」

机にガクンと身体を垂らせるはやてはピクリとも動かない。まるで死体のように、全身から力が抜け落ちていた。

冷や汗を流しつつ、俺ははやての顔を覗く。

「うわ……」

ハリセンが直撃したであろう後頭部と、机に打ち付けたであろう額に、大きな瘤ができていた。少し離れた位置からでも視認できるくらいポツコリと瘤ができていたのだ。

これには同情を感じざるおえない。ただ勢いとノリだけでモノを言っていたはやてに困らされていた月村を助けるべく、ちよつと脚色付けてはやてを美化して事なきを得ようとしたのだが、まさかの結果。

俺は教室に掛けられた時計で時間を確認する。

「午前八時四十六分……ご臨終です」

「はやてちゃあああん！！？」

月村の悲痛な叫びが胸に響いたのだった。まる。

うああああ……。

声にならない苦痛を上げた俺はグッタリと木に背中を預けていた。

現在の時刻、十二時。ちょうど日がてっぺんに昇る時間帯に、俺はグラウンドの隅の木陰で休んでいた。

四限目は体育だ。

視線を明るい前方に向ければ男子はサッカーを、女子はグループごとに様々な運動をしている。

普段は男子がグラウンドの場合女子は体育館、と場所を交互に変えで行っているのだが、どうやら今日は女子の体育を担当する教師が体調を崩して休んでいるのでハムが女子も纏めて監督することになったらしい。二組との合同のワケもここだろう。

ハムはサッカーの審判に忙しく、男女の面倒を両立するのは難しいため女子には自由行動を与えている。

そのため、

「「「キヤー！ 天之川くん、レオンハルトくん！！」」」

なんて女子の金切り声が晴天を突き抜けるまでに響いていた。

春の寒気は去ったというのに、その悲鳴が三半規管を揺らし、背筋を凍り付かせる。この距離でここまで不愉快な気分になるのだから、サッカーをプレイする男子には堪ったものではない。

天之川、レオンハルト。

女子の視線を釘付けにしている二人は、額に汗を浮かべて爽やかな笑顔で活発に動き回っていた。

紫色の切れ目に魔性の輝きを乗せる鴉の濡れ場色の髪をした長身瘦躯の男が天之川刹那。

紅と蒼。対を為す瞳を持ち、太陽のように光り輝く金髪の方がゼロ・レオンハルト。

二人とも、まあびっくりするくらい均整の取れた顔立ちをしている。絶世の二文字がついても恥ずかしくないくらい美形だった。

男から見ても、女子が黄色い声を上げて目をハートにするのは頷けた。

俺が敬遠する二人。

現在、この二人のせいで体調が芳しくないのだ。

始めて肉眼でしっかりと捉えると、やはり異質な力を感じた。人

ならざるもの、しかもよいといえない力。それが原因か世界を創造したとされる精霊たちが恐れをなして精霊術師である俺に群がってきたのだ。

空気を取り込んで吐き出すことを繰り返して生物が生きるように、精霊も取り込めば何かしらの形で吐き出さないと精霊酔いを起こしてしまう。

あの二人に近付けば近づくほど精霊たちは助けを求めて精霊を取り込む回路を持つ俺に入り込んでくる。集合して出席確認を取っている時は安易に精霊を使役もできないから吐き出せず、ひたすら身体の中に溜め続けるだけだった。よって俺は精霊酔いを起こして授業開始早々にダウンしてしまったのだ。

誰からも距離を取って、ゆっくりと風の精霊を使役し、周囲にそよ風を発生させているから激しい頭痛と吐き気はだいぶ収まったのだが、まだまだ全快にはほど遠い。

「気持ち悪い……。あの二人、いつそ斬り刻むか？」

そうすれば無駄に神経を擦り減らす必要もなくなり、輝かしい学校生活が送れる。

目を細めて殺気を飛ばしてみるものの、反応はいつさいない。鈍いのか、サッカーに集中しているのか。

夜道で背後から。いや、背後からじゃない。夜道で数百メートル離れたところから……。ザクッ！ ザクザクザクッ！！ と挽き肉にしてしまえば完全犯罪の誕生だ。

大丈夫。俺ならできる。ふふ、暗殺なんてゾクゾクするじゃないか。

真つ青な顔で不敵に笑っていると、近付く影が一つ。全方向に発散させていた精霊の流れを変える。

「大丈夫？ クレイくん」

「月村か」

気怠げに顔を上げる。そこには前屈みになって心配そうに見てくる月村がいた。体操服姿の彼女は身体のラインがくつきりして艶めかしい。ハーフパンツから覗く白い足は男子から多大なる視線を浴びそうだ。

しかし今の俺にそんな劣情を抱く余裕なんてない。

「体育が始まる前までは元気だったよね」

「ああ……だが時間が経つに連れて気分は下降していたが」

まだ授業が終わるまで四十分近くある。憂鬱な気分は晴れるどころか積もる一方だ。

そんな俺の隣に月村は座る。

「……いいのか？ 大好きな体育だぞ」

「うん。実は私もそんな気分じゃないから」

「ふうん」

生返事をしたのは彼女は俺と近い理由に感じたから。

月村の視線が誰に向けられていたか、気付かないわけもないが、
敢えて黙殺しておく。

「で、はやてさんは大丈夫だった？」

「あは、は……。まだ保健室で寝てる」

あの凄絶なツツコミに打ちのめされたはやては至急保健室へ運ば
れて、現在も気絶中のようだ。

ちよつとした悪ふざけがこんな事態を引き起こすとは面白い。月
村め、とんでもない才能を秘めていたな。

「あの一撃は最高だったぞ。はやてが目を覚ませば、きっと称賛す
るに違いない」

「それは……。喜んでいいのかな」

親友を滅つしたのだ。いい気はしないのだろう。俺なら「おう、
殺す勢いで振り下ろしてやったぞ」と親指を立てれるのに。

「あ、フェイトちゃんが決める」

月村の視線は別に移っていた。

いつまでもあの二人に囚われるのも癪に障るので、俺も釣られて

見ることにする。

校舎側に構えられたバスケットゴールが二つ。それに白線でラインを書いたコートで女子がチームを複数に分けて総当たり戦に励んでいたのだ。

ちょうどプレイ中の試合に月村の友達が参加していたのだろう。月村の言葉から推察するに、それらしき人物はトリコカラーの七号球を自在に操っている長い金髪が目を引く少女だろう。

月村より若干劣る、しかし平均点は余裕で越えるバランスの取れたポデイラインは一切無駄のない軽やかなステップを生み出して他を寄せ付けない速度を形成していた。

舞い踊るように、進路の妨げとなった敵を擦り抜けて跳躍。強靱な足の瞬発力と上体のバランスをを披露したジャンプは彼女を重力から解き放った。

パスッ……

右手に乗せられたバスケットボールは吸い寄せられるようにリングの中に納められる。

「ダンクシュート。さすが外国人ってところか」

何処の国かは知らないが。魔導師ゆえに鍛えているというのもダンクを可能にした一っだろう。

名は確かフェイト……

「フェイト……テスト……テスト……。！ テストゼロテンかつ。フェイト・テストゼロテン・ハラ……孕？」

「フェイト・テストロッサハラオウンちゃん。もう、酷い間違いしすぎだよ。特に最後のは、絶対に漢字変換なんてしちゃ駄目だからねっ」

「ハラオウン？」

「ハラオウン」

「フェイト・T・ハラオウンね。よし、覚えた。ん？ 覚える必要があるか？ ま、覚えてしまったし、もういいか。」

「見事ダンクシュートを決めたハラオウンはチームから拍手喝采を受けて、照れ臭そうに頬を赤くしている。」

「なるほど。弄られキャラか」

「え？」

「何でもない。って、こっち来たぞ」

「視界の隅に映ったのが、ハラオウンは月村の姿を認めると小走りで向かって来た。照れ臭さがまた抜けていない紅潮した頬と満面の笑み。手を振って駆け寄って来る様は、端から見れば恋人を見つけた初々しい少女そのものだ。」

「月村も笑顔で返す。」

「おめでとうフェイトちゃん。さっきの凄かったよ」

「ありがとう、さすが」

うお、女子臭がする。はやてからは微塵も感じられなかった女子臭がする。居心地悪ツ。ただでさえ気分悪くて行動不能なのに。

「でも、さすがが敵チームに入っていればきつと無理だったよ。今日は、何処か体調が悪いの？ 保健室に行かなくて大丈夫？ 私、おんぶするよ」

「うん、調子は少し良くないけど、木陰に休んでいれば大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、フェイトちゃん」

「症状が悪化したらすぐに私を呼んでね。すぐに駆け付けるから」

「うん、そうさせてもらうね」

と言ってニツコリと笑い合う美少女二人は非常に絵になるつちやなるのだが、このお互いを気遣う優しい絆は俺の肌を粟立たせる。淀んだ俺にこの空気は辛い。

グデーツとうなだれて遂に芝生の上に倒れてしまう。なるほど。これが、顔が濡れて力が出ない現象か。

なんて一人遊びで挽回を計るも、憂鬱な気持ちは晴れない。大きな溜め息が漏れてしまう。

「あれ、キミは………？」

不意に、少しおずおずしたハラオウンの声が降って来た。

「あ……悪い。溜め息が聞こえたか？」

「気にしてないよ。え、と……」

「コルトパイソン田中だ」

「……………え？」

「コルトパイソン田中」

「クレイクんっ」

怒られた。

「冗談だ。もう一回すまん。時神クレイだ。月村とはクラスメイトではやてとは一方的なお笑いコンビの候補生に挙げられている」

「あ。二組のフェイト・T・ハラオウンだよ。よろしくね」

律儀に握手を差し延べるなんて。最近の子供からは絶滅したと噂されていたのに。

素直な奴は好きだ。色んな意味で。感心しつつ差し出された手を握り返す。

「ああ。とりあえずよろしく」

悪い体調を押しして、人当たりの良い笑みを小さく浮かべる。

そうしながらも、きつと関わりを持つことはないだろうと俺は踏んでいた。ハラオウンはかなり好感の持てる人柄をしているが、彼女はあの二人の所属する二組にいるのだ。同じ空間を共有するなんて想像するだけで悪寒が走るのに、二組になんて足を運べるわけがない。

「じゃあすずか。私はコートに戻るけど、具合が悪くなったらちゃんと呼んでね。もちろんクレイもだよ」

「うん、ありがとう」

軽快なステップでハラオウンは再び試合へと戻っていく。

「いい子だよ、フェイトちゃん」

「そーだな」

初対面の男子にこの優しさ……。罪作りな女になりそうだ。

まあ、それはそうとして。

「悪い月村。俺かなり限界。寝るわ」

寝ていても精霊の放出は可能だから随分前から取り組もうとしていたものだ。芝生じゃ安眠できそうにないが、この苦行を味わい続けることに比べたら軽いもんだ。

「なら私の膝、使っ？」

すずかは正座して膝を開けた。

「いいのか？」

「少し恥ずかしいけど……クレイクン、本当に具合悪いでしょ。だから、良かったら使って」

見れば月村の顔は少し紅潮していた。

男子に膝枕をするなんて今まで一度足りともしたことはないのだろう。初々しさを感じる。

普通の男なら、同様に顔を赤くしてあわあわと慌てふためくが、俺はそんな常人と掛け離れた存在だ。

「じゃあ、お構いなく」

瞬時決断。

言葉通り、いつさいの躊躇なしに月村の膝に頭を乗せる。柔らかく、温かな感触が後頭部に伝わった。

そういえば膝枕って緋菜によくしているけど、されるのって数十年ぶりだな。

ソツと手の平が頭に添えられて髪を優しく梳かれる心地好さに負けて、俺の意識は闇に包まれていった。

綺麗な吐息を繰り返すクレイの頭を、すずかはソツと撫でてみる。

腰まで届く真っ直ぐで林檎のように朱い髪は小さく細い指の動きに合わせて波打つ。

柔らかい髪だ。すずかは率直に思う。

それに似合っている。学校生活での彼は飄々として掴みどころがなく、しかし軟派というわけでもない。が、家での彼は、妹の緋菜に対してだけは態度がコロリと変わっている。その時の彼に飄々としたものはなく、穏やかで優しい、非の打ち所のない完璧なお兄さんなのだ。数回程度だが、そんなクレイを見ればあの長髪も頷けたより一層穏やかさを強調するためなのだ。

妹のためならなんでもする。とんでもないシスコン野郎だ。

知り合って、一ヶ月と半分くらい。

きっかけははやてだ。

新学期早々、一新されたクラスメイトの中で二人は視線が重なる
と雷鳴の如く衝撃的ななにかが背筋に走ったらしい。

ソクツとではなく、ビビツと。

少女漫画的出会いに憧れる少年少女たちに言わせると、運命的な出会い。

前世はイヴとアダムのような関係だったに違いない　そう感じさせた。

赤い糸で結ばれた、出会うべき瞬間に出会った二人が想いを同じくするのは当然だった。

「なるほど。ボケとツツコミを両立させる存在ですね。分かります」

きっと前世はイヴとアダムのような　ではなく、相方だったに違いない。

笑いの糸で結ばれた、出会うべき瞬間に出会った二人が仲良くなるのは当然のことだった。

その流れで親友のすずかもクレイと親交を持ったのだ。

すずかと思う。

(きっとこの人は私の正体に気付いている)

彼女の血には僅かながらでも人間ではない存在のものが入っていた。

今その話題は無関係なので割愛しておくが、とにかくすずかはクレイが自身の正体について気付いている確信があった。

クレイは精霊術師だ。

世界を創造した逸話を持つ精霊は、魔力素と同様に個我は持たず、しかし知性と生命を持つ存在である。四大元素の風火水土の四つに分類され、常に世界に存在し続ける。しかし公の存在と認められないのは精霊が秘匿されるべき神秘的なものゆえである。

それは精霊と同じく秘匿されるべき悪しき存在を滅するため。

それは世界崩壊の可能性の一つ、科学転用を避けるため。

それは精霊を扱えるものと扱えないもの間に確執を生まないため。

クレイは扱える側にある人間だった。

霊力という、本来見えざるべきに在らぬものを見通す力が、それを可能にする。

妖魔邪霊 人の世に仇為す魔性に抵抗する力を操るもの。

霊力のある者にこそ視認できる精霊と共に魔を滅するもの。

それが精霊術師だ。

そして、不幸にもすずかは妖魔と呼ばれる存在の血が含まれてい

る。
精霊術師が討滅すべき側の存在だったのだ。

すずかには見える。

天之川刹那とゼロ・レオンハルトという、人間とも妖魔邪霊とも
いえない不可解な存在に恐怖してクレイの中に逃げ込む精霊の姿が。
そして精霊酔いに苛まれ、少しずつ精霊を解き放っているクレイの
行動が。

お互い知らないふりをしてただの友人として振る舞っているのは、
いつのまにか暗黙の了解になっていたのかもしれない。

初めこそ警戒していたが、何も言わない、何も行動しない日々が
続いてそれも氷解していた。

だから立場だけ見れば敵対関係の相手に膝枕も許せたのだ。

「好き、なのかな？」

言って、首を横に振る。

この想いはまだ、はやてたちと同様の、友へ向ける想いだ。

そう、”まだ”……。いつの日か、きっかけがあればそれも変わ
るかもしれない。

……ええ、マジで？

M a i n E v e n t ? 3 (前書き)

人肉ミンチはいけません。

Main Event? 3

「……イクン。クレイクン」

「ん……」

仮眠していた俺が目覚めるのは早かった。元々寝起きはいい方だし、眠りが浅かったこともあって意識はすぐにハッキリする。

半身を起こして月村の膝から離れると倦怠感が無くなっていることに気付いた。

「終わったのか？」

「うん。天之川くんたちも校舎に戻っていったけど、調子はどう？」

……………。

「だいぶというか全快した。重い病気が完治した時のようなスッキリ感で今なら重力からも解き放てそうな勢いだ。悪いな。もう昼休み始まっているだろうにお世話になりっぱなしで」

校舎の壁の掛け時計で時間を確認。授業が終わって十分も経過していた。

なるほど。それなら全快だっっているか。

が。

「本当に悪い。いつもならはやてたちと昼食取ってただろうに」

「気にしないで。フェイトちゃんには言っているし納得もしてくれ
たから。それにクレイクんの寝顔って何だかすごくレアっぽいから」

クスツと笑みを零す月村に一瞬言葉を詰まらせる。

「……まあ、確かにレアだな。これ以上ないくらいにレアだ。遊戯
王で例えるとホログラフィックレアカード……いや、モンスターが
飛び出る3Dレアカードが当たるくらいにレアだ」

「まず開発されていないから当たらない、よね？」

「独自開発しなきゃ手に入らないくらいにレアということだ」

「そうなんだ」

「そうなんだ」

いつも一緒に寝ている緋菜にすら見られたことないと思うのだが。
俺が起きたら抱きしめてる緋菜は無茶苦茶苦茶苦茶（誤字にあらす）
可愛らしい寝顔を見せてくれるし。

「自分でもかなり以外だと感じているよ。人前で寝るなんて気絶し
た時くらいだと思ってたが。それくらい体調が悪かったんだろくな」

あの二人エ……！ 極論。襲い掛かって来ないだろうか？ 返り
討ちにして挽き肉にして害虫の餌にしてやるのに。

そのためにはきつかけが必要だな。とりあえずいつも女侍らせて
いるって聞いているから、そいつらを全員寝取れば……

「いや、駄目だな。男の狂言に乗せられる馬鹿女は嫌いだ」

「どうしたのいきなり!？」

月村は驚愕する。

いきなりもなにも、

「どうやって人肉ミンチにしてやるうかって話じゃなかったか？」

「ないよ!？ そんな物騒な単語、カケラも浮上しなかったよ!」

「でも蠟人形は開拓済みだし」

やっぱり新鮮味のあるのは人肉ミンチだよな。店頭に『国産 人
肉ミンチ』……。

いけ ないな。常識的に考えてそんなの扱った瞬間、本店はも
ちろんチェーン店も消え去るな。

だが、それは店頭の場合であって店に出さなければ何の問題もな
いわけで!

余裕で法律違反です。絶対にやめましょう。二次創作だから

と許されるレベルではありません。残酷な描写にも限度があります。

……………チツ！

「で、何の話してたっけ」

「色々腑に落ちないけど……………。寝顔の話だったよ」

「誰が得するんだ。その話題」

「……………私？」

「疑問形ならやめよう。男に関するものでギャグ要素の無い会話に価値はない」

「これがはやてちゃんと共感する理由なんだろうな」

「俺がシリアスの似合うキャラに見えるか？ どう考えても主人公の隣にいるちょっと愉快的サブキャラだろ」

「なんとというか、三枚目？」

「確かに主人公系統って感じじゃないかな」

「ミステリアスな部分もあって裏切り臭がプンプンだな。帰ったら風呂に入るっ」

「自分で言うことなの？」

「さつさと俺の性格を把握しておいてもらおうかな、と」

「誰に？」

画面越しの皆さんに、とは言えない。

「それはともかく、飯いなくていいのか？ さつさと着替えればまだ間に合う時間だろ」

「あ、そうだった！ じゃあクレイクン、先に行くね」

「おー。また会う日までー」

駆け足で校舎へ消えていく月村に見送りの言葉をプレゼントして、俺もゆっくりと歩き始める。

さっきまで男女が活発に走り回っていたグラウンドはすっかり閑散として、吹く風が虚しさを強調しているように思える。土埃が舞い、土の乾燥した匂いを甘んじて受け入れながら空を見上げる。

『 天之川くんたちも校舎に戻っていったけど調子はどう？ 』

月村が口にした言葉。

「体調を崩した原因……言っただけはただけだな」

だが、月村は言った。

天之川と。その原因を的中させた。

「まあ、元々そうだろうなと感じてはいたけど」

月村は俺が精霊術師だと感覚的に理解しているのだ。

精霊の気配を、彼女は間違いなく読み取っていた。俺が少しずつ放出していることにも、もちろん気付いていたのだ。

その理由は、彼女が精霊術師だから……ではない。

まだ精霊術師の世界に足を踏み入れて六年しか経っていないから決定打に欠けていたんだが、これで得た。

月村すずかは陰である妖魔の血を引いている。

だから陽である精霊を視認できた。

おそらく先祖が何かの妖魔と交配したのだろう。触れたりしないと感じ取れないくらい微々たる力が流れている。

「ま、だからといってどうというわけじゃないんだが」

別に気にしないし。お互い今の関係に満足しているし。

精霊術師は妖魔を討滅する存在　なんだろうけど、そんな使命
どうでもいいし。そもそも受けてないし。定義なんて知らないし。
たまに軽い運動と技量向上目的で狩っているからいいんじゃないの。

俺の力は俺の力。お前の力はどうでもいい。お前って誰のこと？

「でも月村家には精霊に関する書物とかありそうだよな。気になるよな。俺、独学だから精霊に関する知識ってあんまないんだよな」

知識で操るんじゃない、感覚で操ってるからいずれ限界は来る。

いくら精密で強大な技量と経験を保有しても情報が少なければ戦闘の勝率は大幅に下がる。

力でごり押しが通じるのは雑魚戦のみだ。ボス戦では敵の弱点、攻撃手段を見切り、味方と協力してコンボを繋いで勝機を見出さなければならぬ。魔神剣、雷神剣、爪竜連牙斬 インディグネイト・ジャツジメント!!

「技名を猛々しく叫んで恥ずかしくないかね」

「瞬迅剣!」「ただの突きですよね?」「え?」「だから、ただの突きですよね?」「いや、あの」「ただの 突きですよ ね?」「あ、はい……。ただの突き!(泣)」「なんて展開はないのか。」

「そついや魔導師もコマンドに技名を入れてたよな」

「アクセルシューター!」「アクセルって自動車とかの加速装置のことですよね? それ加速装置なんですか?」「え? あ、あの……ゆ、誘導弾です」「加速装置が誘導弾? ちょっと意味が分からないんですけど、詳しく説明してもらえませんか?」「あ……う……」「どうして吃るんですか? 何かやましいことがあるんですか?」「ふ……ふええええん! フェイトちゃあああん!!」「とか?」

技名付けるとそんな切り返しがありそうで怖いよな。俺は絶対やる。

その時が来れば徹底的に相手の精神をズタズタにしてやろうと笑った瞬間、腹の音が鳴った。

そっだよ、今は昼休みだったよ。

大好きかつ尊敬かつ憧れの兄であり続けるため、規則正しい生活とバランスの取れた食事に気を遣っているのは当然のこと。空腹で倒れたなんて緋菜に知られたらもうシヨック死してもおかしくない。

他の奴からは基本どう思われても構わないが、緋菜にだけは好感度MAX状態にあってほしい俺は足を早めて校舎へ向かうことにした。

ついでにはやての様子でも見に行つてやるか。

十

着替えを終え、教室から弁当を確保した俺は保健室へ直行する。

階段を降りてたまにすれ違う知り合いに軽い挨拶をしつつ廊下を歩き、保健室の前まで行くと中から何やら話し声が。

「大丈夫か、はやて？ さっきの体育に顔を出さなかったから心配したんだぞ」

「……………」

しかし餓鬼な奴はなぜか激しい憤怒の表情を浮かべる。

イラッ……………。

俺は入れ代わるようにレオンハルトの横を通り抜け、保健室に足を踏み入れると同時に。

「はっ」

鼻で笑ってやった。

「この……………！」

なんて怒りに満ちた声が聞こえたが即座にドアを閉めて鍵を掛ける。

背後からドアを蹴る音も聞こえたが華麗にスルーしてはやてが使うベッドに腰掛けた。

「何をしたんや？」

上半身を起こしたはやてが聞いて来る。

「ちょっとムカついたから馬鹿にしてみた」

集った精霊たちが身体から抜けていくのを感じる辺り、レオンハルトは離れたのだろう。

「ほら、弁当持ってきてやったぞ」

実は俺、教室ではやての弁当も持ってきてあげたのだ。

「ま、まさか私の鞆を物色したんか！？ 乙女の鞆を！？」

「そんなわけないだろ、腐やて」

乙女なんていないし。

「腐やて！？ はやてのことか！ はやてのことかあああ！？」

「クリリンではないとだけ言っておく。アスキラ」

「サラツと吐いたな！ 私のデリケートゾーンに土足で踏み入れたな！？ これはもう言い逃れできへんでクレイクン！」

「悪かったって。でも俺が持ってたらお前、昼食取れず午後からまたぶっ倒れるだろ、腐女子」

「それは感謝しとる　って今度は直球！？」

ハイテンションなはやては無視して俺は弁当を開封する。

黒の長方形に半分収まるのは、黒ゴマの乗った白米。もう半分にはお浸しやら卵焼きやらたこさんウインナー（緋菜が好きなんだよね）やらさくらんぼやらが綺麗に分けられている。流石俺。料理が上手いぜ。

味の方はむしろ見た目以上に自信がある。

上機嫌で箸を取り出した俺はパクパクと腹を満たし始めた。それを見てはやても自分の弁当を食べる。

「それにしても、いやいやはやてさんも隅に置けませんなー」

「？ 何がや」

咀嚼した食べ物を飲み込んでにんまりと笑みを浮かべると、はやての箸が止まった。

往生際の悪い。

「さっき学園の王子様と親しげな会話をしてたじゃありませんか」

「……見てたんかい」

反応が期待外れだ。なぜ気落ちする？ ここは顔を赤くするとこころだろ！

「正しくは最後のほうだけ聞いていた、だが」

釈然としない苛立ち……。これが怒り……？

「同じようなもんや。変なところ見られてもったなー」

肩を落とすはやての反応を見る限り、

「お前、あいつが嫌いなのか？」

「嫌いつちゆうか何というか。ゼロくん、それに刹那くんも私の家族を救ってくれた恩人なんよ。そんな人にこんな気持ち抱くのは最低って分かっるとるんやけど……不気味なんや、あの二人は」

「……………続けて」

思わぬ収穫の予感に真顔になる。

魔導師には霊的要素は備わっていないはず。つまり直感ではなく確固たる理由があるのだろう。

「あの二人、何やなにもかも分かりきっているかのような行動をするんよ。まるで未来や結末を知っているかのような。聞いてみたらなのはちゃんとフェイトちゃんの時もそんな感じやったらしゆうて私らはちよつと敬遠気味なんやな」

未来……結末を知っているかのような　ね。それは想定外の情報だ。そんなレアスキルはカリムくらいだと思っていたが。

「ってか、続けてとか言っただけど何の話？」

知っているのに、こういう態度をする俺は性悪なんだろうな。

しまったと驚愕に目を見開いて口吃るはやてを眺めつつ、俺は食事再開させた。

M a i n E v e n t ? 4 (前書き)

悪魔降臨。卑怯万歳。

Main Event? 4

「諸君。別れの挨拶。則ち、さようならという言葉を慎んでおくらせてもらおう」

これが終わりの挨拶なんだからハムはともかく生徒側は齒の抜けたような気分になる。「起立、礼。さようなら」が懐かしく羨ましい。

言うなりサツサと教室から出ていくハムを半眼で一瞥する。

「本当、我が道を行く男に変貌したな。山田め」

「一年前は地味で冴えん痩せこけた中年やったのになあ。一体どうやって若返りしたんか目茶苦茶気になるわ」

「整形はしてないって言ってたし、本気で努力したんだろうな。動機は不純だが」

アニメのキャラに憧れましたなんて。

「さて、俺は帰らせてもらおう」

支度を済ませた俺は早々に席を立つ。

「クレイクン、いつも帰るの早いよね」

「小学校は中学より授業終わるの早いからなあ。一足先に帰宅して
る緋菜ちゃんに会いとつて溜まらんのやる」

「当たり前だ。お前たちにはあの子の可愛さが分からんのか？ 目
が腐っているのなら仕方ないが。緋菜が妹だったらもう誰もがシス
コンになって全身全霊の力を込めて愛でるのは普通の摂理なんだぞ」

「流石、キンブ オブ シスコン。言うことが違うわ。シスコンは
常識なんか」

「想像してみる。俺のポジションを自分に入れ替えて妄想してみる」
「……………」

はやては顎に手を当てて妄想して、

「妹さんを私に下さいー！」

「死ぬ。いや、殺す」

そんな台詞は一生認めるつもりはない。

手に提げた鞆をクルクル回転させて勢いを付ける。狙うは後頭部。
角でやれば致命傷はいけるはずだ。

緋菜はやらん！

「理不尽やる！ 想像してみる言ったのはクレイクンちゃん！」

「それで言い訳付くと思ってるのか!？」

「何で私が怒られるんやー！」

「落ち着こうよ二人とも」

後は盛大に振り下ろすだけだったのに、月村が割って入り攻撃は中断された。

「離れる月村！ この世には綺麗事だけじゃどうにもならないことがあるんだ！」

「離れんとつてすずかちゃん！ この世の理不尽に私の命が風前の灯や！」

掻き消してくれよう！ 風前なんて生温いわ！

冗談抜きに攻撃に熱を注いでいると、不意に立ち塞がっていた月村が動く。

よし、狩れる！

そう悟った俺は手に力を込める。

一狩り行こうぜ！

「と、思ったけど冷静さを取り戻したからやめます」

「そやな。私も特に言うことはないで」

たらたらと冷や汗を流しながら俺とはやては月村から離れる。

このやりとりをボケと感じたのか、彼女の手にはハリセンが握られていた。

しかも思い切り振りかぶっていたから手に負えない。

あの一撃を受けたら死ぬる。

既に経験済みのはやてなんて蒼白になってガクガク震えているし。

「じゃあ俺は帰らせてもらう。また明日な」

安全確保も含めて俺は一方的に告げると駆け足で教室を出ていく。

いや、危ない危ない。月村にあんな狂暴な一面を与えるなんてハリセン恐ろしや。余計なことしなけりやよかった。

速度を緩めて階段を降り、下駄箱で靴を履き変えた俺は歩幅を若干早くして帰途に着いた。

「…………ふむ」

帰途に着いていたはずの俺は異変に気付いて足を止める。

この道は俺の住むマンションに辿り着く最短距離。昔から物騒な

噂が絶えずすっかり人通りの少なくなった間道はいつも閑散として
いるのだが、今日は何か違う違和感を覚える。

建造物は少なく、見晴らしの良い周辺の景色を見渡す。

「……この感じ、どっかで」

昔は随分お世話になっていた気がするんだが。それこそ日常茶飯
事のレベルで。

しかもこの感覚の中、常に敵を蹂躪していたような……。

「あ、結界か」

なるほど。謎は全て解けた。

この閉塞感は結界の中にいるからだ。昔の俺はよく敵を結界に封
じ込めて楽しんでいたものだが……今回は立場は逆転。俺が封じ込
まれるパターンか。

現在俺の身体に魔力は存在しない以上、発動を瞬時に察知するこ
とは不可能だった。いつから閉じ込められたのかも定かじやないが、
犯人の目星は着いている。

「出て来いよ」

これで沈黙が流れたら目茶苦茶痛いな。シーンてなったらかなり
いたたまれないぞ。

しかもなんだ「出て来いよ」って気取った台詞。あらやだわ奥様

「だったら厨二病じゃない。ここは「その気配を消してる奴……出て来いやっ！」をチヨイスするべきだったな畜生。」

バトル漫画にしょっちゅう出て来る台詞を吐いて軽く死にたくなつた俺を尻目に、結界を張った人物はお約束通り現れた。

「何か用でございますかレオンハルトさん。用件は三文字でお願いします（棒読み）」

よし、名誉挽回汚名返上。「何の用だ」なんてつまらないしな。

背後の電柱からスツと姿を見せたレオンハルトは蒼と紅の瞳を陰しくさせて指示に従った。

「殺す」

わおっ

「理由は？ 三文字じゃなくて可」

「お前も転生者の一人なら分かるだろ」

……転生者？

この人往来でなんてこと口走ってんだ恥ずかしい。 転生者って何？ 頭おかしいんじゃない？

予想を上回る痛々しさにひくついた笑みを浮かべた俺を、この馬ハルトは更に勘違いをする。
鹿は更に勘違いをする。レオン

「刹那と結託して他の転生者は全部殺したと思っていたんだが、まだ生き残りがいたとはな」

「勝手に納得してないで理由くらいは述べるよ。それくらいの権利はあるだろ」

「ねーよ。俺ら以外の転生者にそんな権利。PT事件と闇の書事件に参戦せずに虎視眈々と原作キャラに近付こうとする屑がっ」

また意味不明な単語登場。原作キャラ？ え？ 何この人、現実と二次元がドッキングしてるわけ？

「あゝ、とりあえず病院行く？」

「必要ねーよ！ お前がこれから行くのはあの世ただ一つだ！」

……恥づ。台詞恥づ。真顔で言ってるよ。

全力で俺が引いている中、痛い子は右手首に嵌められた腕輪を輝かせた。

「聖なる光！ エクスカリバー！ セットアップ！！」

掲げた腕輪が姿を変え、空間に生じた刀身や柄やら派手な装飾部品によって剣の形をとってゆく。

同時に、なんか厨二病全開の痛々しい台詞を堂々と吐いてもう末期なんじゃないかとむしる同情すらしかねないくらい馬鹿で愚かで羞恥の塊のような奴の制服がはじけ、新たな衣服がその身を覆う。

言うならお約束の変身シーン。この光が収まる頃には、絶対にこいつもう駄目だよね色々終わっているよね転生者？ 原作キャラ？ 意味分かんねーんですけど？ その存在も意味不明なら頭の方も意味不明なのですかこの野郎はバリアジャケットレオンハルトに包まれ、剣化したデバイスを構えているだろう。

成功すれば、ね。

斬ッ

「え？」

素っ頓狂で哀れな声が聞こえた。

俺は内心で嘲笑う。どんな理由だろうと一瞬の隙を見せたお前が悪いのだと。

精霊術は魔法とは違う。肉声は必要ない。術者の意志に応え、精霊は自ら進んで集い、自らの意志を術者に託す。

術者（俺）は願えばいいだけだ。願い、精霊を事象化させる。

願った形は風の刃。

俺とレオンハルトの距離は僅か十五メートル。人間の反射神経では絶対に回避不可能な神速の刃が具現化させる。俺の意志一つで手足のように動く刃が。

一閃。レオンハルトの右腕を斬り飛ばす。

一閃。レオンハルトの左足を斬り飛ばす。

一瞬かどうかも判断し辛い出来事にレオンハルトは自分の、宙を舞う右腕で左足視認できずに呆けた表情が張り付いたままだ。

自分達を脅かす存在の無残な姿に精霊は歓喜する。

俺が無関心の眼差しを向けていると、レオンハルトの右肩と左太股は思い出したかのように血飛沫を上げた。

変身はもちろん中断。バランスを失った身体が惨めに地に伏せる。

「あ……ああ……！」

レオンハルトの脳がようやく現実を認め、理解の範疇を越えた激しい激痛が襲おうとする。

驚愕に目を見開く姿を見て、俺は次に奴が取る行動を予測して歩み寄る。

結界は既に解けていた。

「ああああ」

「黙れ」

勢いよく顔を踏み付けて唇を塞ぐ。

鼻の骨と歯が碎ける感触が伝ったが、だからどうした。

「!」

さきほどまでの傲慢な態度は一変。恐怖と激痛に目からはダラダラと涙が溢れている。

「!!」

必死に何かを叫んでいるようだが、無視をする。絶対強者を誇る人間が地をはいつくばる光景は無様で仕方がない。

「まあ、あれだ」

平淡な声で言う。夕焼けの空を一瞥して、

「誰に向かって大層な口を聞いていた？ 糞餓鬼」

振り上げた足を今度は首目指して振り下ろした。

「た、助け」

どれだけ祈ろうとギロチンのごとく振り下ろされる足が止まることなどない。

強者の矜持を放擲したその言葉は、しかし最後まで言い切ることもできず、首の骨の碎かれる音に飲み込まれ、レオンハルトの意識と共に消滅した。

「」

俺は踏み付けた足を退けるとレオンハルトを放置して帰途に着く。

正直気になる単語が二つほど挙がったが、まあいい。こいつの正体も気になるんだが、既に事切れた後だから聞き直すことも不可能だし。

だが「刹那」と言った。つまり天乃川刹那はこの二つの単語の意味も、自分達の正体も知っているとということ。

「だからといって聞けないよな」

明日はゼロ・レオンハルトが死体で発見されたというニュースで持ち切りになっていることだろう。そんな状態で問い掛けるなんて告白しているようなものだ。

ひとまずこの疑問は置くことにしよう。

どうでもいい奴の命に何の関心も示さない俺は軽い足取りで自宅へ向かった。

Main Event? 5

地球に転移した際、様々な金品を持ち込んで換金した結果我が家の財政状況は富裕層の方々と同等にまで潤っている。

そう、時神家はお金持ちさんなのだ。

いくら使い込もうと位の数値が下がらない現状にニヤニヤが止まらない俺が選択した住居は、この海鳴市最大にして最高級のマンションだ。

ロビーへと続く短い階段の脇には噴水や植物が設けられ、自然の癒しと秀囲気を取り入れている。山と海が丁度の距離にあり、涼しい風が吹き込むその場所は俺や緋菜はもちろん他の在住者も憩いの場を利用していた。そこを上がっていき、自動ドアの脇にある制御盤の前に立った。

立派なマンションは当然セキュリティも厳重である。

住人は制御盤にある指紋認証に触れれば自動ドアは開くが、訪問者はわざわざ住人の許可を得なければ、部屋以前に建物の中にさえ入れない。制御盤のキーボードを操作してまず住人と連絡を取らなければならぬのだ。

指紋認証装置に手を触れる。そして数秒経過すると自動ドアは開く。

ロビーに足を踏み入れると受付嬢に「お帰りなさいませ」と言われ、軽く会釈をしてエレベーターに乗る。押した階層は最上階。

マンションの最上階に部屋を構えている。鍵を差し込んで扉を開けると広い玄関が目映る。

「ただいま」

シューズインクローゼットを開けて脱いだ靴を仕舞っていると、中からトテトテと可愛い足音が。

来たー！

レオンハルトを討った瞬間の格好良かった俺は一瞬で砕け散り、締めりのない表情が表に出て来る。

仕方がないじゃないか。この瞬間が俺にとって、待ちに待ったゲームの発売日みたいな感覚なのだ。毎日毎日この瞬間はそんなドキドキ感に駆られてしまうのだ。

廊下を歩きながら腕を広げると、それは一切の遠慮なく俺に飛び付いて来た。

「お帰りなさい、おにーちゃん！」

んにゅうと笑みを零す可愛い奴をこちらも強く抱きしめる。

「ただいま、緋菜」

もう一度挨拶をして緋菜を抱き上げる。

金髪の波打った柔らかい長髪。大きくクリツとした碧眼。小柄の体格と保護欲に駆られる可愛らしさはまさにお伽話に登場するお姫様のよう。

そんな超絶美少女お緋菜様を抱き上げる俺は甘い香りと温かで柔らかい身体に触れてこれ以上ない幸福感にやられ、モザイク処理を施してほしいくらいの締めまりない顔だった。

「んー」

緋菜が頬をすりすりしてくる。

「……この野郎ーっ」

毎日毎日可愛すぎるぜ！

抱きしめる力を強くして頭をなでなでしつつリビングへ向かった。

部屋の中は、とても綺麗に片付けている。どのような家具にも調和する静やかで自然な色合いを基調とした幽寂のカラーテイスト。

天井には埋込型のエアコンを設置しているためすっきりとした空間を演出している。

キッチンは使い勝手の良い五口コンロを設置して一度に複数の調理をする際に遠慮なく対応できる。おかげで食する時はどれも出来立てはやはやである。壁には二階にある大型ユニットバスのお湯張り、追い焚き、保温までスイッチ一つで自動操作可能なオートバス。

そしてリビング、ダイニング、寝室に温水床暖房が設置されている。ちなみにロビーの受付嬢に連絡すれば美容室などの予約すらもやってくれる。

至れり尽くせり、というのはまさにこのことだろう。とち狂った経営者が高級ホテルをそのままマンションに利用チェンジしてくれたのには本気で感謝だ。

鞆をソファに放り投げてその後に俺も腰を掛ける。

ぼふんと緋菜も膝の上に乗せて完了。

「相変わらずかわゆい奴よのう」

「んー。おにーちゃん、朝も言ったよ」

「ていうか毎日四、五回は言ってるよ」

「照れる……」

「くっ、かわゆすぎる……！」

ほんのり頬を紅潮させる緋菜の爆発力は核弾頭すら凌ぐというのか！ かつて最強と謳われた（かもしれない）このお兄ちゃんをここまで骨抜き状態にさせるなんて！

「犬耳と尻尾を装備すれば確実にお兄ちゃん陥落する自信があるわ」

「んー？」

「なんでもないよ。それより緋菜、今日は宿題はないの?」

「ん。ない」

「良かったね。緋菜はお勉強苦手だから」

すると緋菜は頬をプクーツと膨らませて、

「むー。緋菜お勉強苦手じゃないもんっ」

「2×9(にく)＝?」

「? 緋菜はお肉よりケーキの方が好きだよ」

馬鹿な子のほど可愛いというのは本当だね! 話の流れをおもつきし無視しちゃってるよ。

「おやつ食べる?」

「食べゆ!」

一度緋菜を抱き上げてソファにころりと転がしてキッチンの冷蔵庫を開ける。

一番下の棚に置いてある皿を二枚取り出す。フォークとセットで乗っていたのは昨日買っておいたチョコレートケーキだ。

ソファに戻り、テーブルに皿を乗せると、緋菜はさっきまでいた俺の膝上に座り直す。

「手作り？」

「それは流石にお休みの日じゃないと無理かな。平日は店のケーキで我慢してね」

「ん。お休みの日は作ってくれるの？」

「もちろんだよ」

緋菜の頭に顎を乗せてフォークを手に取る。一つしかないのは俺が緋菜ぶんを食べさせてあげるからだ。

「はい、あーん」

ケーキをフォークで切って口元へ運ぶ。

「あ〜」

ぱくっ

「おいしい？」

「ん」

「そっか。よかった」

ああ、この空気だよ。このほのぼのした癒しの空気が心を満たしてくれるんだよ。

学校じゃまず味わえないものだ。最近なんていつもはやてと漫才

やってるし。楽しいのだがあれは癒しとは呼べまい。

「おにーちゃん、何かあった？」

緋菜にパクパクと食べさせていると、不意に聞いてきた。頭に乘せた顎を外すと緋菜は顔を上げて視線を合わせてくる。

「ん？ 何かって」

細い眉を寄せて「んー……」と俺の顔色を伺う。

「嬉しい……こと？ おにーちゃん、すっきりした顔してる」

相変わらず緋菜は直感力が高い。感情を隠すなんて刃物で鉛筆を削るくらい楽勝な俺のソレをあっさりと紐解いてくる。

この子は色んな意味で俺以上の才能の子だからなあ。俺の保護欲を射止めるなんて並ならぬ力を感じるぞ。

顔を上げた緋菜に対し、俺は顔を下げ、額と額をピタッとくっつける。

「なんか今日の帰りに変な奴に絡まれてね。日頃学校生活で溜まっていた鬱憤を正当防衛を立てに晴らさせてもらったんだ」

「せーとーぼーえい？」

「自分の身を護るために相手を徹底的にいたぶって苦しめて二度と反抗できないようにすることだよ」

「おにーちゃんらしいねっ」

”らしい”ですか。そうですね。流石緋菜さん、お兄ちゃんも黒さも看破してりましたか。

「……とりゃ」

なんか悔しかったので反撃に移行する。

チヨコレートケーキを食べ終わると俺はフォークを置き、緋菜の脇腹、しかも一番敏感な部分を搦る！

「んに！？ ん〜！」

唐突な俺の行いにビクツと地上に打ち上げられた魚のように跳ねると、緋菜は魔の手から逃れようと身をよじらせる。

が、甘い！

「ふっふっふ。お兄ちゃんから逃れようなんて百年早いよ！」

スピードアップ！ 指に力も込める！

こちょこちょこちょこちょ、の間にツンツンツンも混ぜる。

このじゃれあいには最近ご無沙汰だったから油断していたな緋菜さんよ。悶絶するまで続けちゃうぜよ！

「ん！ お、おにーちゃ、や、やめ……！！」

「無理。だって可愛いもん」

ね〜。

「り、理由になってにゃひっ……！ ん〜〜！」

五分後。

「はぁ……はぁっ」

宣言通り悶絶するまで弄り倒された緋菜は俺の胸にもたれ掛かってクタンとしている。

息は乱れ、頬も紅潮し、涙目となっている緋菜は子犬や子猫の以上の破壊力を発揮していた。堪らずギュッと抱きしめて愛でてしま

「おにーちゃ、ひ、酷い……」

「だって緋菜があまりにも可愛いから」

「理由になってないよ……」

「いらないもん」

「？」

息の整いつつある緋菜はコクンと首を傾げる。

そんな緋菜の頬を撫でるように触れて、俺はニッコリと笑う。

「大好きな家族と触れ合うのに、理由なんていらないよ。たまにはこういう刺激的なじゃれあいだっていいと思わない？ 時が流れて緋菜も異性が気になるお年頃になったらこんなことできなくなるんだもん。緋菜が子供だから許される特権を今のうちに堪能しておきたいんだ。変わらないものなんてありえないから」

時が流れれば自然と人も変わる。

変わらない日々なんて決して訪れない。時間という定めは数学の公式のように決められた倫理しか叩き出さない。感情や努力などで覆せるものじゃない。だからいち早く現実の仕組みを理解して享受するかが大切なのだ。

変革なんて自らの意志とは無関係に勝手に起こる。未来や明日なんて前向きなヴィジョンに囚われて今ある幸せを、今という時だけにある”幸せを蔑ろにするのは愚か者のすることだ。

切り捨てるためでも、選ぶためでもない。今も未来も貪欲なくらい幸せを求める行為こそが幸福な生き方のはずだ。

いずれは緋菜も成長し、自立心を育てて巣立っていく。そうなる前に、できることはやっておきたい。色んな愛情の育み方をしてみたい。

そして門出の時は満面の笑みで見送るんだ。「いつてらっしやい」

って、「いつてきます」って家族だからこそ交わせる言葉で。

久々に帰って来たと思えば知らない男を連れて来て、幸せそうな顔で「私、この人と結婚するんだ」って

え？

け……結婚？ 緋菜が？ 結婚？

いや、な、ななな何言っておりますかクレイさんったらそんな馬鹿な。ちつくと待つてつかあさいな……！ 俺が一世紀ぶんの愛情を掛けて育てたお緋菜様を、見知らぬ男が掻っ攫っていく？

「チイス、トウイス、チヨリース。妹さん頂いていくツス。サンキューです。幸せにしてもらいます。あ、お兄さんお金ないっす。パチスロいきたいんで一万貸してくれないっすか？」

……。

……。

……。

「
%#&*@
\$

(解読の不能な断末魔) !!
」

緋菜を退けて立ち上がった俺は生まれて初めて咆哮が如く叫びを上げた。

「!?!? ど、どうしたのおにーちゃん……!?!?」

「何がチーイスだ、何がトウィーイスだ、何がチヨリーツスだ!?!? チャラ男か!?!? チャラ男如きにうちの緋菜が奪われてしまうんか!?!?」

「おにーちゃん? 今、いい話してたよ? 緋菜、ジーンってなってたのに、何処に辿り着いたの?」

「だつて緋菜! あいつ『幸せにします』じゃなくて『幸せにしてみせます』ってほざいたんだよ! もう色んなモノがぶちキレて我慢なんてできないよ! しかも無職なのかあの野郎!?!」

「おにーちゃん、緋菜を置いてきぼりにしちゃ駄目」

「フツ……フフフ。そっか、そうだったな。緋菜を見知らぬ男になんてあげません。そうだよ、だから……だから、この世に存在する雄に分類されるすべての生物を消滅させたらいいだよ。大丈夫、俺ならできる。逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ? そうだよ逃げちゃ駄目だよ。俺が一人残さず狩り尽くして根絶やしにするんだから」

「おにーちゃん!?!」

ぼふっ

「はっ！ 俺は一体何を」

ソファの隅にあったクッションで顔面を叩かれて俺はドス黒い何かから解き放たれた。

「緋菜が聞きたい」

見れば緋菜はブーツと頬を膨らませて半眼でこちらを見ていた。

「そういえば何の話してたっけ。いい台詞を吐いたような気がしたんだけど」

いい台詞いい台詞……どうでもいい人間の命はどうでもいいとか？

なんか違うか。

緋菜も分かってないみたいだし、気になる。

本格的に頭を悩ませる俺が唸っていると緋菜のお腹がぐうっと鳴った。

「おにーちゃん、お腹空いた」

刹那主義ですなお緋菜さま。

「さつきチヨコレートケーキ食べたよね」

「ん。でも減っちゃった」

緋菜のたどたどしい口調は魔力を秘めていると思う。

「仕方ないな。でもお夕飯まで時間があるからお握りでいい？」

「んっ」

元気よく手を挙げる緋菜の頭を撫でて、俺はキッチンへ向かった。

M a i n E v e n t ? 6 (前書き)

M a i n E v e n t ? 5と6を同時に更新しました。

Main Event? 6

「おかしい……。お菓子欲しいの略ではなく、純粹におかしい」

部屋と同様の幽寂カラーテイストなキングサイズのベッドに座り、ゼロのニュースを眺めていた俺はちよっくらシリアスモード。膝上に緋菜の頭が乗っかって可愛らしい寝息が聞こえて来る。

激しく、ぎゅーってしたいが今は自重。シリアスモードなのだ。

夕食、入浴を終えて緋菜とじゃれついたりして今日も一日が終わろうとする時間帯。

いつもは緋菜の就寝時間である十時に彼女を抱きしめて共に夜を過ごすのだが、今日は生活リズムをずらしてまだ起きていた。

原因は簡単。

そろそろゼロ・レオンハルトに関するニュースが報道されるんじゃないかと予想していたからだ。

あの場所は確かに人通りは少ないが、だからといって一日中無人なわけじゃない。俺のように近道に利用する学生をちらほら見掛けるのも記憶している。

だから奴の死体は誰かに発見されて警察からテレビ局へ情報が送られているはずなのだ。

だが、ゼロはそんな気配を見せず、もう終盤に突入して

「…………結局放送されず、か」

そのまま終えた。

中学生が惨殺（注：犯人、俺）されたのだから速報されてもおかしくないのだが。

何かすっきりしない。納得できない。齒に食べ残しが詰まったかのような気持ち悪さがこびりつく。

精霊術で斬ったから秘匿されるべき神秘が関わり、世界の裏事情というのが絡んでしまったのだろうか？ 最後は踏み潰したのだが…………。

「考えても仕方ないか」

不愉快さは拭えないがこの程度、うちのお緋菜様を抱きしめれば問題ないわ！

とりあえず明日、望み薄かもしれないが朝刊とニュースを確認後、様子を見に行くことにした俺はテレビと明かりを消して、床に着いた。

テレビと朝刊は予想通りと言っべきか報道はされなかった。

さっさと支度を済ませて緋菜とともにマンションを出る。

「緋菜、今日はいつもと違う道を行こうか」

「んー？ ん」

緋菜はコクンと頷く。

「ありがとう」

手を繋いで俺たちは歩き始めた。

あの閑散とした道は時間短縮できようと朝の通学路には相応しくない。挨拶は将来、社会で生きるために勉強以上の必須事項だ。これはきちんとさせておかないと、俺のようになってしまつと判断したので通学路は活気のある街路を選んでいたのだ。

しかし今回はことがことなため致し方ない。問題があるような引き返せばいいだけだ。

緋菜としりとりをしながら歩く。

「じゃあ王道に、しりとりの”り”からだよ。リール」

「ルビール」

「ビール」

「ルーっ」

”う”でいいよね。ウール」

「る……ルーレットっ」

「トータル」

「る……！る、ルーフッ」

「へえ、よく知ってたね。フリル」

「うにっ！？る……る……ルーツッ」

「鶴」

「……おにーちゃん、”る”ばかり。……ルーム」

「る攻めはしりとり必勝法だよ。貪る」

「うー……また。っ。必勝法？留守っ」

「そう。”る”で始まる言葉と”る”で終わる言葉を叩き込むのが必勝法。吸い取る」

「るー……もう、やー！」

緋菜はبيضとそっぽを向いた。

「ごめんごめん。やられる側は楽しくないよね」

「むー」

「抱っこしてあげるから機嫌直して」

「……………」

ピタリと足を止めて、逡巡すると緋菜は俺に向かって両手を広げた。

本当に可愛らしい子だな。はやてたちが驚愕に目を見開いて戦った、優しい笑顔を浮かべて緋菜を抱き上げる。

顔を胸に押し付けて頭をなでなでしながら先へ進む。

数分で例の脇道に辿り着いた。

もし他の術者が動いているなら風の精霊は使用しない方が懸命だ。ばれるとまたサクツと斬り裂かなきゃならん。

あくまでただのシスコン & amp; ブラコン兄妹な通行人AとBで様子見をするだけでいい。声優は穏やかとクールを両立できるなら新人でも可。でも緋菜はアルルウ役を演じた沢城さんで。

「緋菜、今日の晩御飯は何がいい？」

「んー。ハンバーグっ」

「りょーのかい」

なんて有り触れた会話を交えながら殺害現場へ向かう。犯人は現場へ戻って来るのは本当だったんだと実演して実感した。

「ん？」

俺は思わず足を止めた。

現場の距離はもう肉眼で認められる位置にあるというのに、そこに人だかりはなかった。

というか人っ子一人いない。

まるで何の出来事も起きてなかったかのように。

「……！」

距離を詰める。

思わずその足が早まったのも無理はなかった。

冷や汗が流れる。胸に押し付けて緋菜の視界を奪っていてよかった。こんな姿を見られれば不安を煽るだけだ。

焦る気持ちを自制心で押さえ込み、有り得るであろう可能性を思いつく限り重ねていく。だが下調べもない状態では限界はあっさりと来る。可能性を導き出すには非常識という材料がいるわけで、自身の認める非常識の範囲でしかその可能性は導き出せない。

今回のケースは、

「これは、どうなっている……！」

余裕で俺が生きてきた非常識を更に越えていた。

何も無い。

そう、何もなかった。

ゼロ・レオンハルトの死体も血飛沫の散った痕も、何もかもが消えていた。

まるで初めから存在していなかったかのように。

「……………」

らしくない焦燥感に舌打ちをして冷静さを取り戻す。様々な場数を踏んで来た自身の経験値の豊富さに感謝しつつ、予測する。

水の精霊を使役すればコンクリートに付着した血糊も腐臭も綺麗さっぱり洗い流せるが、そんな気配は感じられない。つまり死体の隠蔽工作に精霊術師は関わってないということ。

ならば表沙汰にしない理由なんてあるのだろうか？ まだ秘匿されるべき神秘があるというのか？

確かにあの男は精霊が恐れをなしていた存在だった。ただの人間がどれだけ奇特な才能を持つとも世界の法則を覆すなんて不可能だ。

あれがただの人間を逸脱した存在だというのは五年と半年前に認
知済みだが……。

「やめよう。多分正解は出ないな」

判断材料が少なすぎる。正解を導くに時間制限があるわけじゃな
いから無理矢理単語と単語をくっつけ合わせる必要はない。

「どうしたの？ おにーちゃん」

ひょこつと胸に埋めていた顔を突き出した。

「なんでもないよ。じゃあ行こうか」

ニッコリ笑い平静を装って歩きだす。

その行き先で俺は更なる驚愕を得ることになるのだった。と、含
みを見せてみる。

驚愕が連続するというのは傲岸不遜を常に置く俺にとって非常に
屈辱的なことだ。

だからと当たり散らしたりはしないし、普段なら知らないなら調
べればいいとあっさり決断するのだが、今回その決断は適応されず
お蔵入りになる。調べようがないのだ。いや、たった一つだけあっ

だがそれは安易にしていることじゃない。

手段はあるのにそれが取れない歯痒い現状が苛立ちを加速させる。

「何なんだねさ一体」

いつもの軽口が出てくる余裕があることに安堵しつつ、二組の様子を伺う。

聞こえるもの、見えるものは他の教室と変わりなかった。

男子の騒々しい談笑や

女子の華やかな会話。昨日見たドラマやファッション誌、それからゲームや漫画の話がグループから聞こえて来る。

まるで何も起きていないかのように、平凡な日常が今日も繰り広げられていた。

そんな光景をひとしきり眺めて積もった心労を溜め息と共に吐き出す。

「俺にとっては非日常なんだがなあ」

「何が？」

不意に背後から声が掛かって振り返る。

「ハラオウン……で合ってたよな」

そこにいたのは昨日体育の時に初めて言葉を交わした少女。大海

に反射するように輝く金髪と人を惹き付ける魔性の輝きを放つルビ
ーの瞳が印象的な、いわゆる美少女。

「うん、そうだよ。きみはクレイ……だったよね」

「当たらずとも遠からずじゃなく大正解と言っておこう」

無意味な言い回しをしてハラオウンと向き合う。彼女は腕に三つ
の缶ジューズを抱えていた。

「……パシリ？」

この品行方正なブルジョア学校にもあったんだな。

「ち、違うよ。これは罰ゲームっていうもので、なのはもアリサも
そんなことしないよ」

なのは？ アリサ？ ま、いつか。どうせモブだろ。

それよりこの平々凡々な回答。

「なんだつまらん」

「クレイは何を期待しているの？」

「刺激と波乱とカオス」

「学校で求めるのじゃないよー！」

「テロとか？」

「そんなの求めるなんて絶対に駄目だから！」

「OK。なら核弾頭だな。三日待て」

「それ刺激と波乱越えて絶望しか残らないよね！ クレイ、道徳って理解してる！？ それに三日待てって、三日で用意できる代物じゃないよ！」

「何を言ってる。この国には核三原則があるじゃないか。『持つて、作って、ぶち込みまえ』キャッチフレーズは『困った時には核弾頭 皆にカオスをお届けしますっ』」

「非核三原則！ 法治国家を何だと思っているのクレイは！？ そんなキャッチフレーズ聞いたことないよ！」

「なら実現すればいいだけだ。任せろ。人心掌握は得意中の得意だ」

「任せないよ！ 絶対にクレイに国の未来は任せられないよ！ 人心掌握が得意ってどういうこと！？」

「こつこついうこと。現に今も一人手の平で躍らされている」

ニヤツと笑う。

「あ………」

ようやく気付いたハラオウンは病的なまでに白い肌ではない健康的な肌を真っ赤にさせた。

「うっもっ、クレイ！」

缶ジュースを持ってなかったらポカポカ叩かれていたかもしれない。もし相手がツンデレとかだったら、この状態から回し蹴りが放たれるだろう。甘いわね、私にはまだ足があんのよ、みたいなの？

適度なストレス発散をしたところで本題を切り出す。

「ところでハラオウン。ちょっと聞きたいことがあるんだが」

「……なに？」

弄られていたことに気付いたハラオウンは羞恥に頬を赤くしながら、拗ねたように返事をしてくれる。

「ゼロ・レオンハルトって名前の男なんだが、聞いたことないか？」

「ゼロ・レオンハルト？ うっん……………多分”ない”と思うよ」

やっぱり。

「そっか。ならいいんだ邪魔したな」

「うん。じゃあ」

俺は二組から離れ、ハラオウンは教室へ入って別れる。

自分のクラスの廊下まで歩いて、思わず窓から天を仰いだ。

「誰もあの男のことを覚えていないってどういうことだよ」

二組へ行つたのは確認のためだ。

クラスメイトはもちろん、はやてやすすかまでゼロ・レオンハルトという存在がいたことを忘れていた。

いや、忘れていたというよりは、初めから存在していなかったようにゼロ・レオンハルトに関する情報や歴史は別の情報を用いて修正されていたのだ。

人の記憶だけじゃない。授業中に風の精霊を飛ばして二組の教室を覗いたのだが、彼がクラスに在籍していたことすらも無くなっていた。

机やロッカー、名簿。なんにもかもが抹消されている。

同じクラス、同じ局で働くハラオウンならカケラくらいは残っているかとも思ったが結果は見ての通り。

「ここまで来ると自分が白昼夢を見ていた錯覚に陥るな」

自分で撒いた種がまさかこんなことになるとは。溜まらず自嘲だつてでてくるものだ。

小事なら自分が撒いた種でも無視してくれてやるのだが、この鬱々とした気分がいつまでも続くのは拒否しておきたい。

「……仕方ないか」

危険が伴うため最後の手段に位置付けていた方法を選ぶしかない。

気は進まないが、これじゃないと求める答えは手に入らないのだ。

俺は天乃川刹那との接触を決意すると踵を返して教室へ戻った。

Main Event? 7 (前書き)

なのは「私、出番ないのかな？」

クレイ「おめでとう。Main Event? で、最初で最後の
会話」

なのは「え……? 終わり……?」

Main Event? 7

呼び出しはしなかった。お互い何の接点もないのだ。予めことを伝えておくのと相手に余裕を与えることになる。もし看破されると、動揺という感情が生まれず迷いの比較的少ない敵と戦わなければならない(端から戦う姿勢)。

俺は騎士を自称したことはない。真剣&真っ向勝負なんて掲げないし、未知数の相手にそんな愚行は犯さない。

精神論や根性論なんて論外だ。

勝率は最大値まではいかなくともそれに近い状態を常に保ち続ける。ヒーローじゃないんだ。必要なら逃走して様子見も平然とできる。

校門に寄り掛かって天乃川刹那を待ちながら戦場を探す。最高の条件が揃った場所を。

風の精霊がある限り、この海鳴市に俺の目が届かないところなんてない。そこから近距離で、なおかつ人気のないところといえば……

思考を一度断ち切る。ようやく玄関から天乃川刹那が出て来た。

烏の濡れ場色のような髪と深いアメジストの切れ目。ゼロ・レオンハルトのようにがっしりした体軀ではなく少し華奢な、俺と同じで着痩せするタイプだろうか。

連れがいないことにほっとした笑みを一つして、校門に近づく天乃川の前に立った。

「ちょっと付き合ってくれないか？ 大事な用があるんだ」

「大事な用？」

返ってきたのはレオンハルトのような邪険な声ではなく、純粹に疑問一色のもの。

「ああ。それに火急でもあるから良い返事がもらえるとありがたいんだが」

「………すまない。今日はそんな気分ではないんだ。できれば明日にしてみもらえないか？」

そういつて通り抜けようとする天乃川に囁く。

「ゼロ・レオンハルトについてなんだけど」

「!？」

驚愕に目を見開いた天乃川が勢いよく振り向いた。

確信。やはり覚えている。

「着いてきてくれるか？」

「………ああ」

声を低い同意を得た俺は踵を返して校門を抜ける。後ろから一瞬足りとも外れない敵意の視線に薄い笑みを浮かべながら戦場になるであろう場所へ向かった。

学校から数分の距離にある郊外の森。学校帰りに森林浴をするなんて奇特な趣味の持ち主でもなければ、まず近付かない打つつけの場所である。

まだ、何も言葉は交わさない。未だ背中を刺し続ける視線を飄々と受け流しながら森の奥へと分け入っていく。

妖魔の気配はない。算段を壊す可能性のある危険な獣の気配もない。いや、熊や猪なんて一刀の元に切り捨てられるんだが緋菜との約束で動物は殺せないのだ。お兄ちゃん約束護るよ。人間も広義に解釈すると動物だなんて言わないよ。

暫く足を進めると道が開けた。鬱蒼とした茂みや高々と聳え立つ木々のない斜面が十数メートルほど続いている。

ここまで来れば大丈夫か。

俺は数歩進むと足を止めて振り返った。

「さて、じゃあ大事な用についてだが」

「その前に」

強く言って天乃川は遮った。

「お前は転生者か？ それとも目撃者か？」

向こうから聞いてくれるとは手間が省けて助かる。

「俺もそれが知りたくてお前を呼んだんだよ。あの馬鹿から、転生者とか原作キャラとか意味不明な羅列を並べられて殺されそうになつて」

「それで振り返りにしたのか？」

「正当防衛だ」

嘘は言っていない。騙してはいるけど。

「どうやって？ あいつは技量こそなかったが、莫大な魔力と特殊能力を持っていたというのに」

「んなことはどうでもいいだろ」

見る機会無かったし。

「あの馬鹿は俺より弱かったから死んだ。それだけのことだ。お前だって転生者とやらを散々殺って来たんだろ」

「あのお喋り……」

憎らしげに顔を歪めて吐き捨てる。

自らの行いを悔いているのか、それとも暴露されたことに怒って

いるのか……おそらく両方か。

「で、とりあえずお前の持つてる情報を教えてほしいんだが？ 結果はどうあれ、そっちの同類が命を狙ってきたんだ。知る権利くらいはあると思うんだが」

「……少し待ってくれ」

そう答えると天乃川は目を逸らして何か考え込む仕種をする。

俺は内心舌打ちをする。

馬鹿と行動を共にしていたことからこの男も単純で扱いやすいんじゃないかと思っていたが、どうしてなかなか冷静だ。馬鹿の手綱を握っていたということか。

それに、発言と佇まいから天乃川は自らの才に自惚れはせず、質実に鍛練を重ねていたことは感じ取れる。たかが五、六年魔導師を続けたていどでは熟練者とは呼べても玄人とは呼ばれない。だがそれに通ずるだけの雰囲気はある。

何を考えているのか、とりあえずこっちが不利な状況に傾いたのは確かだ。

数十秒の間を置いて、天乃川は意を決したように口を開いた。

「条件がある」

「何だ」

げっ、と声が出そうになった。

「俺と戦ってくれ」

そう来るかよ。

天乃川刹那という男の人柄を理解する。

騎士道精神というか自らの矜持を持っているのだ。そして、おそらく覚悟も。そういった男の目をしている。そんな男に脅しは効かない。手足を斬り飛ばしたとしても、白状しないまま自決するだろう。矜持だけを残して。

それに冷静さが加わる。転生者……予測するならば、前世の記憶を引き継いでいる者か。それなら確かに精神年齢の高さから、落ち着いた物腰も頷ける。

答えを知るためには彼の条件を飲むことは必須になってしまった。

「理由は？ 敵討ち？」

「違う。ゼロの死はもう俺の中で整理できた」

なるほど。仲間だったが、それほど好きな奴でもなかったのか。

なら

「力を示してほしい。上から目線ですまないと思うが、ゼロを倒したお前の力を、俺にも見せてほしい」

瞬間、冷静だった天乃川の瞳に闘志が宿る。

風は吹いていないというのに、周囲の草木はざわめきの音を立てる。膨大な魔力が奔流したのだ。

「バルムンク」

俺に見せるように、自身の眼前に広げた右の手の平。その中指に嵌められた翡翠の指輪が煌めく。

すると奔流する魔力が収束し、強く鋭く練り上げられる。

対峙までしておきながら、冷や汗が流れる自分の心境に驚いた。

緊張。 歓喜。

「はは、最高だな」

まさか真つ向勝負に武者震いするなんて。

自分を客観的に評価すると、小細工、罾、ハメ技、騙し討ちなんかが非常に大好きな人間だ。自身がやるのは言うまでもないもないし、他人がしているのを見ても楽しくなるどころか助言までしてしまうそうだ。そして始末の悪いことに、他人が仕掛けた罾を鼻歌混じりに看破し、悔しげに嘆かせるのに至っては病み付きになるほどだった。

そんな俺が武者震いなんて本当に可笑しい。

だが、それもいい。

結局のところ俺は歓喜しているのだから別の感情で水を差す必要はない。

丁度良かったじゃないか。精霊術師の最高峰ハイエンドを自負する俺に市内を徘徊する妖魔は物足りない。天災規模の精霊数を制御する技術はあっても使う機会は訪れず、未だ自らの技量を肉眼で視認できていないのだ。

俺の期待に応えるように天乃川が結界を作動してくれる。

景色は変わらないが、分かる。俺と天乃川は常に在る世界から切り離された別の空間に立っているのだ。二人しかいない世界で、二人だけの戦争が開催される。

天乃川は一瞬で防護服バリアジャケットを装着した。白鎧と、籠手、黒のコートが合わさった奇妙な形の鎧。機動性と防御力を等しくさせているように感じる。

キーン　と高く澄んだ音と共に足元に出現した三角形の魔法陣、それはベルカ式である。

右手には漆黒の剣化したバルムンクと呼ばれたデバイス。その重さを確かめるように軽く一振り。

肺に溜まった濁った空気を一息で全て吐き出すと緩やかな動作で剣を構える。正眼に捉えた両手剣の切っ先が、ぴたりと俺に向けられる。相対距離はおよそ八メートル。身体に魔力強化を施したなら間合いの内と言っている。

開戦の合図はこちらでやっていいのだろう。

足元に落ちている手頃な石を拾って上に投げる。

「これが落ちたら　でいいな」

「ああ」

重量に従い落下する石を俺たちは見向きもせずに対峙し続ける。
頂点を認めれば、何秒後に地に着くかなんて誤差無しで予想できる。

三。

風の精霊に呼び掛ける。

二。

精霊が応えて召喚され、収束する。十、百、千と。

一。

願い、操る。奴を斬れ。

トン……。

一閃！　神速の刃が走る。地面が綺麗にスライスされて直進し、
触れるもの全てを鋭利に斬り裂く。

かわされた。

認めるよりも早く、それを理解していた俺は身体全体を包むように、莫大な風の精霊を凝縮させた。鎧とも結界とも言えるそれは蒼穹の如く澄み渡る。

そこに背後から横一文字に剣閃が走る。

回避の動作は必要ない。台風に匹敵するほどに凝縮した風の精霊を打ち破るにはパワーが足りない。

受け流され、ベクトルを狂わされ、重心を崩した天乃川の脇腹を殴る。振り向く際に生まれる身体の回転力とバネを乗せた強大な力が一点で炸裂し、天乃川は地面に転がる。防護服の上からじゃ大したダメージは与えられず、殴られた勢いで天乃川は距離を取った。

追撃に風の刃だが、シールドに阻まれる。

チツ。

これは風の精霊を使った術 風術の弱点だ。召喚速度、探索に優れる風術は引き替えに一撃の攻撃が弱い。

そもそも戦闘に特化されていないのだ。並の風術師なんてお粗末そのもので援護くらいしか取り柄がなく、ゆえに風術は非力やら下術と蔑まれている。それが精霊術師の常識とまで。

俺の風術は高層ビル程度なら輪切りくらいワケないのだが、それでも防御を重点に置いた魔導師や騎士のシールドを貫くのは簡単じ

やない。風の結界に回している分の精霊をいくらか攻撃に配置換えすれば実現可能だが、あの速力に魔力を持たない今の身体は反応できない以上、賭けはしない。

「速いな。音速レベルか」

本当に感心する。直感も優れている。知覚するより速くそれが作動して、風の刃の回避を可能にしたのだ。一瞬でも早ければ音速でも神速の攻撃は対処できる。

俺の素直な感想に、天乃川も笑みを一つして、

「フェイトもこれくらい、いやこれより速いさ。それよりお前のそれは一体何なんだ？ 魔力をまるで感じない攻撃なんて熟練の魔導師でも反応不可能だぞ」

「そんな一撃に反応するお前も何だろうな？ 冗談で済むレベルじゃないぞ、その直感力は」

「レアスキルのようなものさ。気にしなくていい」

「なら、俺のもレアスキルってことでいい」

天乃川は大人な対応をしてくれる。言い返すなり戦いに集中してくれた。

「ありがちな言葉で言わせてもらおう　行くぞ」

より多くの精霊を召喚して風の刃を形成する。百本を越える風の刃が、全包围から天乃川に襲い掛かった。同時攻撃ではなく、それ

らの全てが軌道とタイミングを、時には緩急も付けながら飛翔する。

「凄いな……」

天乃川は素直な声を漏らしてそれを観察した。どう動こうと、雨のように　しかもそれぞれが別の指向性を持って　降り注ぐ刃は、どれだけの速度を持ってしても回避不能だ。

なら、どうすればいいか。

天乃川は即座に決断した。

柄を逆手に持ち、魔力を練り上げた。収束した魔力は、ガシャンガシャンと剣が装填するような音を立てると更に膨れ上がる。

「カートリッジシステムか。いつの間に管理局は実践配備させたんだよ」

苦虫を噛むような顔をしてしまう。

カートリッジシステムは保有魔力の絶対量で劣るベルカの民が、自在に魔力を扱うために編み出した機構で、特殊な方法で圧縮した魔力を弾丸状のケースに内包し、デバイス内で炸裂されて魔力を瞬間的に高めるものだ。炸裂時の魔力の反動等の問題から、高いレベルで扱いきれる術者の絶対数は少なく、ゆえにベルカ式魔法は衰退していった。

局員であろう天乃川がそれを使っているということは、カートリッジシステムの不安要素のおおよそを排除できたのだろう。

天乃川は地面に剣を突き刺した。技が起動したことから、特定の動作で発動するアクショントリガーだ。

「爆碎ッ！」

言葉通り、突き刺した地面を中心に赤い光が炸裂する。

俺は即座に距離を取る。

足元の土を跡形もなく吹き飛ばす爆発は当然上にも広がり、空を翔けていた百の風の刃は抵抗も許されず焼き払われた。

「無茶苦茶だな……おい」

頬を引き皺らせながら、俺は風に乗って舞い上がる。

爆炎は広がり、肉眼で天乃川の姿を確認できないが風の流れを見ればまだ行動を始めていないことは分かる。物体が動けば風は自然と起きるのだから。

俺の攻撃可能射程距離は半径数百メートルを楽に越える。範囲に入っていれば、どの地点からでも攻撃を放てるのだ。

もう一度、先と同様に風の刃を形成する。仕留められるとは思わない。あくまで魔力や体力を削るための牽制だ。

爆炎を中心に風の刃の包囲が完了する。まだ放たない。解放するのは天乃川が空戦に持ち込んだ瞬間だ。

砲撃に備えて、大気密度を操り光の屈折率を変える。そうすれば

相手の視覚を狂わすことができ、命中率は大幅な下落へ繋がりがり回避が容易になるのだ。

ただ無策に上昇する愚かな振る舞いはせず、天乃川はタイミングをずらして直射型の砲撃を連射する牽制攻撃をしながら空の舞台へ上がって来た。

俺のいる空域に光条が殺到する。

しかし屈折率を変化させ、位置をずらしている俺を正確に射抜くことはできず、最低限の動きでかわしきる。

楽しい。ああ、そうだな。俺は楽しんでる。

才能という名の財宝を入れた宝箱を持つこの男は（昔はどうか知らないが）だからといって自らに溺れることなく財宝を丁寧に磨き上げれる大人の面を持っていた。黙々とそれを磨き続け、綺麗な財宝に更なる光沢を与えた結果が今、目の前にいる。

一手企てれば、それを看破して。二手、三手企てれば、やはり看破して。

俺と同じで、将棋やチェスなどボードゲームをする時のように、ありえるだろう可能性を常に頭に書き続けているのだ

こういう奴はそういない。思考と行動を同率で働かせる人間は。

だが 封殺完了だ。

不敵な笑みを浮かべて、停滞させていた風の刃を走らせる。

魔導師の基本魔法防御は四種類ある。

バリア。攻撃を防御膜で相殺して柔らかく受け止める汎用性の高い防御。

シールド。攻撃と相反する魔力で固く弾く、反らす防御。

フィールド。範囲内で発生する特殊効果の発生を阻害する防御。

物理装甲。素材強度による物理防御。

この四つの中で俺の放つ風の刃を防げるのは最も範囲の劣るシールドだけだ。フィールドは単発では弱いし、物理装甲も刃の一閃の前には紙切れ同然だ。バリアに至っては大気密度を操って魔力素を拡散させれば発動すら困難になる。

この戦いが面白いのは確かだが、本来の目的を見失うほど愚かではない。歓喜に震えようが、怒りに震えようが、何をすべきかだけは履き違えない。

天乃川は爆炎系の技を使った。魔力変換資質が炎熱だと踏んだ俺は天乃川が全力を出す前に静めることを決めた。

精霊だろうと魔法だろうと、風と炎は互角の力をぶつけ合えば必ず炎が勝利する。炎の持つ莫大なエネルギーは他の地や水さえも凌

駕するのだ。

だが、スピードは風が最速だ。先に召喚を始め、相手の力が収束されない内に攻撃すればいい。そのタイミングさえ読み切れれば敗北はありえない。

天乃川は飛翔するべきではなかった。範囲の小さいシールドに、上下左右あらゆる方向から襲い来る刃を防ぐのは不可能だ。

勝利は確定した。

が、それ自体に意味はない。天乃川は純粹な騎士として挑んできたのに対して、俺は自分が何か明かしていないのだから。始まる前からハンデは決定事項になっていたのだ。

「終わりだ」

徐々に対応しきれなくなり、風の刃に刻まれつつあった天乃川にそう告げた。

だが

Main Event? 8 (前書き)

緋菜「おにーちゃん、何読んでるの?」

クレイ「ん? バカテス」

緋菜「面白いの?」

クレイ「結構いけるかも。特に、語り部である主人公は成績悪いのにどうして地文では跋扈とか難しい言葉を知ってるのかなー、という謎が」

緋菜「……? 楽しむところずれてないの? んー?

パキイン！

唐突に、金属が割れるような音が森一帯にまで響き渡る。

は……？

確かに、勝利確定だと踏んだのは早計だったと認めよう。絶えず精霊術を発動していたためすっかり忘れていたが、精霊たちは天乃川刹那という存在を避けていたのだ。そんな男が常識範囲内の勝利に終わるはずがなかった。

だが　これは流石にないだろ。

風の刃による全包围攻撃が、その音と共に霧散した。掻き消されたと表現した方が正しいかもしれない。俺の意志に従っていた精霊が強制解除されて散っていく。

精霊術師の回路を持たない人間が精霊に干渉するなんて、そりゃあ精霊だって怯えるはずだ。世界の根源と謳われる精霊の理解の範疇すらも越えているのだから。

一瞬ですべての風刃を消滅させた天乃川は一旦行動を止めて視線を合わせてくる。

「お前、あの時神クレイか」

唐突に問われる。その質問の意味は聞き返すまでもないだろう。

”あの”時神クレイと言ったのだから。

「さあ、どうだろうな」

この男だって俺が求めた情報をタダで渡してくれないのに、俺が素直に肯定するわけがない。

だが、天乃川は問い掛ける前より確信していたらしく、

「時神クレイ 優れた知略に洗練された戦闘技術、新たな魔法の創造など卓越した才能を持ち、管理内世界において”最強”の魔導師と噂され、数々の勲章を授かったことから市民から英雄と讃えられた男」

「当然だな」

誇らしげに俺は頷く。

「だが、それは表向きの顔で、本性は局員からは悪魔やら鬼畜やら魔王やらと恐れられ、握った個人情報をも盾に上層部まで掌握しかけていたとんでもない悪党だった」

「それも当然だな」

更に誇らしげに頷く。

「局員で行われた『彼氏にたくないランキング』『憧れないランキング』『結婚したくないランキング』『何でこいつが美形なの？無駄なんですけどありえないんですけどチョーム力つくんですけどランキング』『上司にほしくないランキング』『部下にほしくないランキング』『同僚にほしくないランキング』『人として終わっているランキング』『市民よ、気付いて！ 奴は悪魔よランキング』

と、様々な負のランキングでぶっちぎりの一位を総なめにした鬼畜野郎と言われていた。奴がいる限り局内に平和は決して訪れない。我々は勇者が現れる瞬間まで耐え凌ごう　なんて適当に読みあさっていた雑誌に載ってあったが、本当なのか？」

「ああ。あの頃の俺は、市民の人気を上昇させつつ局の連中を如何に苦しめるかという人生ゲームに全身全霊を尽くしていたからな」

フ、若さ故の過ち。反省もしてなければ後悔もない。あるとすれば、それは名残惜しさ。

「何で市民に漏れない？」

「雑誌や人伝いで情報が外に出ないよう脅し……ゴホン、話しあったりしていたからな。その情報も管理局のブラックボックスにあっただろ」

「お前の存在そのものも一緒にな」

英雄（市民評）を黒歴史にして封印するなんて人間のすることか嘆かわしい。

「百近く生み出した魔法つてのも」

「同員を苦しめ、俺が楽しむため”だけ”に創造した。犯罪者逮捕には一度たりとも使ったことはなかったはずだ。俺の矜持にかけて」

圧倒的な力を見せ付けると市民は最終的に応援してくれなくなるからな。強すぎると冷めやすいし。

いい感じに傷付いて接戦パターンを演じていれば、コロツと騙されてくれるんだよな。

俺の迷いなき断言に、天乃川は呆れたように肩を落とす。

「だから当時のことを聞こうとしたら皆、悲鳴を上げて逃げ出したのか」

「俺の労力は無事捻ってくれたようだな。恐怖を植え付けるのは数ある特技の中でも有力候補だったが、最の文字も追加するべきか」

「追加するなよ、そんな特技」

「安心しろよ。こっちの世界に来てから一度もそんなことはしていない」

おちよくりがいのある奴がないっていつのも一理だが。

「そうだよ。それが疑問だったんだ」

「ん？」

「時神クレイは今から約七年前、アンノウンと接触してそのまま行

方不明となった。彼の所属していた部隊も全滅し、真相は今も闇に包まれたまま」

「そんなこともあったな」

生返事をして、乱れ邪魔になった髪を払いのける。

「教えてくれるのは 虫がいいと言うものか」

「当たり前だ。阿呆め」

遵法精神なんて逆さに振っても出てこない俺が対価も無しに知識を授けるわけがない。

ここで一度尋ねてみる。さっきの全方位多重攻撃で決めたつもりだったので、戦意が若干冷めつつあった。

「で、力を示せてことだった。もう充分じゃないか」

しかし天乃川はかぶりを振った。

「せっかくだから決着をつけたいと思うんだが」

「最初に掲示した条件を覆すつもりか？」

「いいだろ。ここ最近滅多になかった接戦が展開されそうなんだ」

鋭い目の下にある口角が吊り上がる。

「このバトル中毒者が……」

気怠げに吐き捨てて、再度意志の力で精霊を召喚させると、その気配を察知した天乃川も剣化したデバイスを構えた。

「相性は最悪だが、それがいい」

なんて言ってる。

ベルカ式はクロスレンジからミドルレンジに特化された術式ゆえにロングレンジとアウトレンジに対応する術を殆ど持たない。

そして俺の主な戦闘距離はロングレンジとアウトレンジだ。一撃の威力は収束砲撃に遠く及ばないものの、キョ範囲の射程距離それも範囲内ならどの位置からでも指向性を持った攻撃を放てる。

両極な俺たち。なら相手の土俵で戦うのは愚行だ。

如何に戦いの主導権を握り、自らの攻撃が最大限に活かせる状態を維持して初めて勝機が見えてくる。天乃川の実力はクロスレンジとミドルレンジで真価が発揮されるだろうが、この勝負で披露させるつもりはない。

さっきの砲撃はロングレンジに対応していたので、次からはアウトレンジを中心に戦いを展開させる。

一体どうやって風の刃を消滅させたのか、見極める必要がある。

牽制攻撃を放ちながら距離を取ろうと風の刃を形成していると、

「んむ?」

風を扱う精霊術師の俺に、風の精霊が教えてくれる。

「どうした？」

天乃川が聞いてきた。

「街の方角から結界に気付いて近付いてくる奴がいる」

「やっぱり感知されたか。初めは軽く戦うつもりだったからすぐに解除すれば問題ないと思っただが」

「自業自得だな」

丁度いい。戦意は持ち直せてないんだ。

「勝負はお預けだな。力は示したからしっかり教えてもらおうぞ。騎士さん」

「く……分かった」

立場が逆転する。天乃川とは対照の愉快的な笑みを浮かべて俺は姿を消した。

「せっかくだからどんな言い訳をするか見届けてやるう」

そして弄ってやる。

「ちなみに相手はハラオウンだぞ」

「……そんなことまでできるのか」

「大気を操る俺に透明化なんてお手の物だ」

姿を消したというのは現場から遠ざかったのではなく、言葉通りの意味のまま。光の屈折率をいじれば対象を透明化させることもできるのだ。

「打破するには？」

「教えるわけないだろ」

サーチされれば即バレだが。

「ほら、くるぞ」

それだけ言って口を噤む。

俺の宣言通り、数秒の間を置いてハラオウンが空を駆けて天乃川と対面した。

彼女の手にはデバイスであろう黒の戦斧が握られており、いつもは真っ直ぐに流れている金色の長髪は左右に分けられていた。中等部が上がってダサくなったと一部から囁かれている平凡な制服も、黒の制服の上に白のマントを羽織った防護服へ姿を変えている。

……六年前に着ていた黒のレオタードに黒のマントという、自分はMです露出狂です私を見てー！ な衣装は流石に自重なされたか。

「刹那」

「F・セイエイ（ボソツ）」と、天乃川にだけ聞こえる位置に移動して茶々を入れる俺。ちなみにF・セイエイの元はfrom・聖永だったか

「黙っててくれ（ボソツ）」

「どうして結界を張ってるの？何かあった？」

「人を襲ってましたのー（ボソツ）」俺。

「クツ……。ちょ、ちょっと異変を感じて調べていたんだ」

「えー？まーじーでー？（ボソツ）」俺。

「異変？」

「胃、変？胃薬いる？持ってないけどねー（ボソツ）」俺。

「……（ピキ）！だが、誤解だったようだ……！調べてみたが何もなかったよ」

「五階で誤解を五回した（ボソツ）」俺。

「その割には凄く険しい顔してるよ。まるで激しい怒りを無理矢理押し殺しているみたい。やっぱり何かあったんじゃない？」

「その割には凄く険しい顔してるよ。まるでハゲしい頭を無理矢理隠し通しているみたい。やっぱり頭皮に何かあったんじゃない？（ツルリン）」俺

「ブチッ！」

おや？

斬ッ！

聞こえてくる声の方向から位置を割り出した天乃川は本気の殺意を宿した剣を振り下ろしてきた。

バシィィ！ と神業を発揮する俺。真剣白刃取り（風の精霊を集める時間がなかったため実はかなり危なかった）。

「何をする。危ないじゃないか」

「ああ、そうか。どうせならカートリッジも追加しておくべきだったな」

「さすがにそれは身体が左右に分裂するぞ」

「そのつもりでやったんだがな……!!」

「軽いジョークじゃないか。サラッと聞き流せよ」

「お前が局員全体から嫌われている意味がよく分かったよ」

「甘いな。以前の俺は更に魔法や畏も同時発動させていた」

「なお悪いだろうがッ！」

天乃川の手に力が籠り、剣が徐々に近付いてくる。その間に風の精霊を集めて風の結界を作って受け流すことに成功した。

危ない危ない。

距離を取って事なきを得る。まだだ！ まだやられんよ！

「ク、クレイ!?!」

「ん？ あ、姿見えてる」

ハラオウンの驚愕した声で気付く。どうやら天乃川の奔流した魔力に風の精霊が流されたようだ。

「どうしてクレイがここに!?!」

「あ、えー……あ、天乃川くんに呼び出されて！ いきなりガバツて襲われたんだ！ 僕はやめてくれて言ったのに天乃川くんは僕の穴にゴールデンボールが装填された巨砲を突っ込んで収束砲撃を

「嘘をつくな!?!」

「ん。下ネタは自重すべきだな」

素直に被った猫を脱ぎ捨てる。

天乃川は怒りに顔を赤くしていたが、ハラオウンは複数のナニが混ざっているような表情もあった。ナニがナニとは敢えて言うまい。

「クレイと会ってまだ全然時間が経ってないけど、人となりは大部分把握できたよ」

「俺もだ」

「そんなハッキリと質実剛健なんて言うなよ。照れたらどうする」

「いや、誰もそんなこと言ってないから!」

「分かってる。だから一々全力でツツコミいれんでいいぞ。おかゆみたいなツツコミで充分だ」

「どうすればいいフェイト。俺、今まで生きてきてここまで殺意を抱いた相手は初めてなんだが」

「人の神経を逆なでするのが凄く上手いんだよ、きっと。私も同じ気持ちだから」

「物騒な。局員が市民に向かって口にする言葉じゃないぞ」

「やれやれ。最近の管理局は教育がなっていないな。」

「もしお前に逮捕状が出たら真っ先に捕まえに行つてやる」

「俺がそんなへマをするわけないだろ。完全犯罪しかやらん」

「認めた! 犯罪をしたことを認めたよこの人!」

「残念、ハラオウン。証拠がありません。口から出まかせ言ってるかもしれないぜ」

「逆に俺たちが今こいつを完全犯罪で殺ったほうが世のため人のためじゃないか？ 明らかに他の犯罪者より凶悪な感じがするんだが」

「それは否定できんな。昔はよく悪意の塊と言われたもんだ」

「自分で認めた！」

「俺の話はもういいだろ。どう頑張ったってどうにもならないってそれより話を進めよう」

「流す理由が最悪だな。まあ、確かに納得できるけど」

「だろ。だから、吐け。そして一秒でも早く俺を帰らせる」

緋菜に会いたい緋菜に会いたい緋菜に会いたい。

いつもならもう帰宅して緋菜を全力で愛でているから禁断症状が現れそうだ。色んな奴から外道だ悪魔だ魔王だと呼ばれているが、あの子の前ではそんな要素はカケラもないぞ。シスコン素で全て塗り潰すから。

「何の話？ 私、まだ色々状況が飲み込めてないんだけど」

ハラオウンが純粹無垢な瞳をして小首を傾げた。

「なら空気になってる。すぐ終わる」

一刀両断に切り捨てる。俺が不意にときめくのは緋菜だけだ。

「酷いよ！」なんて泣きそうなハラオウンは置いて天乃川と向き合う。

「本当に知りたいのか？ 知らずに過ごしていれば転生者から無意味に命を狙われるなんてことはないと思うぞ」

「こつちも事情があんだよ。それに狙われたら返り討ちにするから問題ない」

精霊術師として、なぜ転生者と呼ばれる存在に精霊が敬遠しているのか、その理由くらいは知っておきたい。知的探究心から、莫大な魔力、ありえないレアスキルなど常軌を逸した彼らが果たして何者なのかも。

それに知っておけば、もしも場合の選択肢だつて増える。あの子を護るためにも、不安要素は排除しておきたい。ロリコンなんて出てきた日には 想像しただけで殺戮衝動が止まらない。

天乃川は何処か思い冷たかつ表情を浮かべて逡巡するが、意を決したように息を吐くと悠然とした様で口を開く。

「俺やゼロは元々は別世界の、いわゆる平行世界と呼ばれる場所の住人だつた」

「刹那、何を言って」

「

スツと手でハラオウンを制止させる。

「続ける」

「そこで俺たちは一度死を迎えた。子供を庇ったり、自殺だったり、殺されたり」

ん？

「何で三通りもある。お前たち二人じゃないのか」

「ああ。最初は数十人くらいいた。今となつては俺で最後だがな」

一度死んだ。

転生者。

このキーワードで大体の予想は立てられる。

「そして死んだ俺たちはその時の記憶を受け継いだままこつちの世界に転生した。赤子からだったり当時のままの姿だったり幼児化したり」

「原作というのは？」

そう問い掛けると、天乃川は居心地の悪そうな視線をハラオウンへ向ける。本人は「？」と少し間抜け面だが。

「俺のいた世界で、こつちの世界は個人が作り出した創作物だった。つまり漫画やアニメの世界に転生したんだ」

「は？ 頭は確かか？」

「嘘じゃない。それに、そう考える以外に原作キャラという言葉で仮説とか立てられるか？」

「……………」

俺はかぶりを振った。短時間で仮説を立てられる問題じゃない。

ゼロ・レオンハルトは原作キャラと接触した俺を殺そうとした。つまり俺はその原作に存在していなかったのだらう。そして俺と友好的関係を築いたのは八神はやたと月村すずかの二人。この二人のうちどちらか、もしくは二人ともが原作キャラということ。天乃川の態度からハラオウンも原作キャラだな。

未来が分かっているかのよう　確か保健室ではやてがそんなことを言っていた。既に漫画やアニメで展開を知っていれば、先回りすることも可能、か。

なら、この世界は一体何なのか。その疑問は置いておく。これは一瞬でいくつも仮説が立ってしまった。

「転生した奴は皆、お前みたいな人知を超越した能力を持っていたのか？」

「ああ。時間を止めたり、未来を読んだり、他の漫画とかに出てきたような技を使えたり、能力だけ見ればSSSランクに相当する連中ばかりだった。だが皆死んだ」

「殺し合ったんだろ、どうせ」

「……………ああ」

重苦しく、天乃川は首肯した。

理解はできないが理由は分かる。

自分が大好きな漫画の世界に生まれ変わって、大好きなキャラクターたちと出会って、その物語を実際に目の当たりにできて。それはさぞ幸せなことだろう。

力があれば時には共に戦って、助けて、気に食わない展開は揶揄げて、あまつさえそのキャラクターから恋愛感情を向けられたりして。そういうのにヒーローのような存在に憧れて。

別に悪いことじゃない。理由はどうあれ、その世界に生まれたのなら自分の行動や未来は自分に決定権がある。BAD ENDが原作なら、それをHAPPY ENDに変えるのも自由だ。

だが　その自由や憧れが愚かな結果を招いた。

自分と同じ存在が他にもいた。

それもたくさん。

その中には既に自分が望んでいた輪に属していた者もいて、好きなキャラと親密な関係を築きつつあった者もいて。そこから嫉妬と憎しみが生まれる。

それが刃に変わり、自らの欲を優先して他者を傷付けて殺す。自分こそがそこにあるべき存在だと主張して。

そうした結果、転生者たちは手を取り合うことをせず殺し合って、最後の最後まで妥協する手段を取れなかった。

「お前もその一人だったわけか」

「愚かだったんだ。本当に愚かだったんだ。退屈な日常が一気に非日常に変わって、好きだったアニメの世界に行けて舞い上がっていたんだ。救いたい関わりたいたいなんて醜い劣情の混じった思いで原作に介入して、知ったかぶった知識を開かして　その結果、むしろ気味悪がられて裏目だったがな」

口角を吊り上げて自嘲の笑みを漏らす天乃川は何もかもが飽和しきったかのような、そこには一切の感情もなかった。

「ゼロ・レオンハルトが逆上した理由にそれか」

「こんなことなら力なんて与えられなければよかったんだ……。退屈な日常がどれだけ綺麗だったかを思い知らされて」

「与えられた？　誰に、いつ？」

偶然じゃなく、誰か手招きをする黒幕がいたというわけか。

「転生する瞬間だ。そいつは好きな能力を複数持たせてくれて、更に顔の造りも自由に変更可能にしてくれた」

「そいつは一体何だ」

「それは……」

天乃川は言葉を濁して視線をさ迷わせる。

ここまでできてそんないい加減なことが許せるものか。無理矢理目を合わせて訴える。

言え、と。

天乃川はグツと喉を詰まらせた後、それはともう一度口にして、

「か」

その先を聞くことは不可能だった。

「え………?」

横から、ハラオウンのそんな素っ頓狂な声が耳朶を打つ。

さっきまでそこにあったものがなくなった。

さっきまでそこにあったものがなくなっていた。

さっきまで首に乗っていた天乃川の頭がなくなっていた。

言葉を紡ごうとしたその口は頭部一緒に宙を舞って、クルクルと赤い液体をスプリングクラのように降らせている。

そして、思い出したように切られた首から循環していた血液が噴水のように吹き出る。

シャー、と。まるでシャワー感覚に。

「あ……ああ……あ……！」

「伏せろ！」

蒼白の顔。身体を硬直させて動けなくなってしまったハラオウンの身体を強引に掴んで抱き寄せると、即座に身体の上下を反転させて頭から森へ突っ込む。

一瞬遅れて、ゆっくりと重力のままに落ちていく天乃川の頭と身体が攻撃を受けて砕け散った。

その肉片が、鮮血が、降り懸かろうとする。

風の精霊を召喚して受け流す。そして即座に風の精霊を使った捜索範囲を最高まで引き上げる。

「くそ、また俺が気付けない攻撃だと……！ 転生者はあいつで最後じゃなかったのか！？」

まるで手玉に取られたようで、非常に不愉快な屈辱が支配する。

数々の非常識が積み重なって遂に爆発してしまった。

こいつ 絶対殺してやる！

俺だって堪忍袋の緒は切れる。この鬱憤、この苛立ちは攻撃を仕掛けてきた奴の死で晴らさせてもらう。

苦虫を噛んだ表情を消せないまま、地面に落ちるスレスレでカー

ブして、地面と平行をキープしたまま森を降りて一番近く、人気のない自分たちの学校の校舎裏で停止した。

幸い攻撃は襲ってこなかった。天乃川一人を狙った犯行だったのか、とにかく助かったと思うのが筋だな。

ハラオウンを離して、地べたに腰を降ろす。

「一体何だっというんだ……」

一気に疲労が全身にのしかかった。意志を保ち続けなくなり、精霊の使役も不可能になる。風の精霊という中継が消えて世界が急激に狭まり、とうとう肉眼でしか世界を確認できなくなってしまった。

その視界にある唯一の人物はなおも顔色をなくしてへたりこんでいる。

「大丈夫ですかー」

「……………」

反応なし。

当然といえば当然か。どんな間柄だったかは分からないが、昔馴染みの同僚だったのは言葉から推察できる。共に戦った仲間が目の前で首を跳ねられ、矢継ぎ早に肉片に変えられたのだから悄然するのも無理はない。

それに唐突の惨劇だ。理性的に受け止めて状況の整理をするなど、十五の小娘があっさり取れる行動じゃない。

逆に俺は普通に冷静だ。精霊術師（以前は魔導師）という生業上、人の死に多く立ち会っている。それに慣れた俺が出会ったばかりの者に、一々感情移入なんてするわけがない。

「風の制御が消える前に、奴の気配は掴んだ……。明日にでも狩るか」

逃げ切ったつもりかもしれないが、風の精霊が天乃川を殺った存在の気配を一握りていどながら掴んでくれた。一日休んで全快した状態なら感知できる。

いつから俺と天乃川の戦いを見ていたのか分からないが、ジョーカーはまだ切つてない。

散々意味不明な力を振り回されて溜まった鬱憤は晴らさせてもらう。

「さて、そうと決まったら帰って緋菜を愛でよう！」

消費した力を全快するにはお緋菜様を愛でて愛でて愛でてまくるしかない。あのほんわかとした空気を堪能しなければ精神は回復しないのだ。

テヘッと笑みを零して回れ右。

お兄ちゃん、今帰るよ！

「ま、待って！」

えー？ 空気読みなさいよ。俺、すっかり気持ち切り替えて帰宅して至福の時間を過ごすつもりだったのに何でやねん。

げんなりして振り向くと、まだ悄然とした調子が抜けないハラオウンがよろよろと立ち上がる。

「……………何？」

「一体何が起こったの？ 刹那は……………」

「死んだろ。お前だって見たはずだ」

「！」

突き付けられた現実に言葉を詰まらせる。知っているはずなのに、一縷の希望にしがみつこうとするから。

「冷めてるんだね……………」

「どうでもいい人間の命はどうでもいいと切り捨てられる人種でね。で、もう帰っていいか」

「まだ」

強い口調のハラオウンに、俺は辟易の溜め息を着く。

「何が起こっているのか、その情報はクレイのほづが多いでしょ？ クレイの使っていた力も含めて色々聞きたいことがある。任意同行してほしい」

「却下」

「お願いだから言うことを聞いて」

「任意って言葉の意味理解してんのか？ その手にある戦斧を使ったら、上っ面だけの言葉しか吐けない信頼性ゼロの人間に成り下がるぞ」

俺は皮肉の笑みを浮かべて、悔しげに顔を歪ませたハラオウンを
はつきりと見下ろす。

そして数秒後、

「なんて言ったりしてな」

コロツと表情を変える。

「え？」

「無理なんだよ。お前が俺にそんな権利を持ち出す理由なんてどこにもない」

「何を言ってるの。刹那が殺されて」

「どうせいなくなってるよ」

「……どういう意味？ いなくなってるって何？」

「今日でも明日でもいいから『天乃川刹那って知ってる？』的な質問をクラスメイトにしてみなさいな。多分 誰も覚えてないよ」

そう言って歩き出す。いちいち質問に答えていたら切りがないし、そんな労力もやる気も残ってはいない。つーか、そもそも答える義理がない。

ハラオウンが後ろから制止の声と行動の音がしたが、突風（これくらいなら何とか可能だった）を起こし砂を巻き上げて、その隙に離脱する。

おっと、買物に行かんと……今日は出前でいいか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7009x/>

精霊術師と三人の魔導師たちと

2011年10月21日03時05分発行